



婦人の子供

第一卷
第一號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の雑誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿三字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざるべし。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行

毎月一回五日發行○第一號明治三十四年一月二十日發行

定價

一册金拾錢郵稅金壹錢○六册前金五拾七錢郵稅金六錢○拾貳册前金壹圓拾錢郵稅金拾貳錢○臨時増刊は其都度定價を定め別々に申す○切手代用は費割増にて壹錢切手に限る

注文

は總て前金にて日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂宛領收證は別に發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべし送金は神田今川橋又は日本橋區町郵便取扱所受取人金昌堂宛の事見本を要せらるゝときは郵便切手(但し壹錢に限る)拾貳枚を添へて申越さる可し

購讀者

宿所姓名は楷書にて御認め之事○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候間前金御送付を乞ふ○御入用なき時は御斷りを乞ふ

編輯

に關する御照會及原稿御寄贈の節は東京本郷區女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會宛のこと

廣告料

三十二行廿四字詰一行十八錢○特別欄一行四十錢○一等二十錢○特別半頁十一圓○一頁二十圓○一等半頁五圓八十錢○一頁十圓○二等半頁五圓○一頁八圓

明治三十四年八月二日印刷
同 年八月五日發行

不許
複製

編輯者 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 杉山辰之助

印刷者 東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地 中野鉄太郎

發行所 東京市京橋區築地三丁目十五番地 帝國印刷株式會社

發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内 フレール會

大賣捌所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂
東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども 第一卷第八號目次

卷首

改良婦人服

子ども

うらしま〇とんぼの唱歌〇丈助の忠義〇紙の剪り
方〇とんぼ取り〇悪の滴〇考へ物

家庭

子供を叱ることにつきて

子供は

夏の飲みもの

今昔いろは料理

學術

夏の花邊

講義

兒童研究法

史傳

野村望東尼

下村三四吉

林 ぶみ子

松村 ひさ子

孤 帆 生

石井 泰二郎

醫學士 長瀬 復三郎

無名氏

東海 生

文學士 松本 孝次郎

文苑

靜女歎貴女怨

和歌數首

說林

母と教育

寄書

愉快なる家庭

余が實驗せる特殊なる家庭とその

兒童も心

雜錄

八月の天地

千代尼の夏季の俳句

女監を見る

松島案内

俚俗總領のじんろくといふことに

時論抄録

彙報

高安月 郊

飯島 八千溪

齋藤 鹿三郎

東京 秋 影 生

菅原 文一 郎

岩手縣師範學校 飯島 八千 溪

長野 石坂 よし

長野 石坂 よし

摩 川 史 生

香園 女 史

秋山 七 子

秋山 七 子

秋山 七 子

秋山 七 子

秋山 七 子

女子高等師範學校教諭 黑田定治君校閲 堀越源次郎氏 土屋權四郎氏 共著

國語綴り方

クロス洋紙製
紙數百八十頁餘
定價金四拾錢
郵稅六錢

附錄 國語綴り方練習帖

尋常科拾錢
高等科拾錢

●本書は小學校國語綴り方につき是が修述の方法程度及材料の撰擇上幾多の疑問を明解し文例及教授方法を各學年各學期各月に配當して示し且兒童をして綴らしむる各般の場合につき丁寧に意見を述べたるものにて要は實地教育者諸君教壇の好伴侶たりしむるにあり又附錄として別に兒童用綴り方練習帖あり之を用ふる兒童諸君の便

發兌

東京日本橋區本石町三丁目廿三番地

金昌堂

發兌

大阪東區備後町四丁目

石井書店

高等師範學校講師文學士遠藤隆吉氏著

現今の社會學

定價金三拾錢
郵稅金四錢

社會學の書公刊せらるゝ者多しと雖も概ね翻譯の類のみ其日本學者の著述に係かり且嶄新の説を以て著述せられし者之を現今の社會學となす斯書は學士の特見に屬する所の集合意識説を以て一貫せる者にして其見識の卓拔なる議論の明晰なる而して行文の流暢なる毫も遺憾とすべき所なし且つ學士の豊富なる學植を以て社會諸般の事實を把へ來り僅に之を數十頁に縮めたる者なるを以て字々味あり句々真理あり他の引き延ばして社目的とせる書に類せず弊學士に乞ふて出版の榮を得たり社會の大勢に着目する人乞ふ一讀して以て其價値の存する所以を知了せられんことを

發兌 大阪備後町四丁目 集成堂

東京日本橋本石町 金昌堂

東京神田表神保町 中西屋書店 各地賣捌所

總裁小松宮大妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人
大日本女學會發行
(東京麴町區土手三番町廿八番地)



第七號發兌

第壹號以下再版出來せり

大賣捌 東京堂

每月一回廿五日發行定價金拾五錢全國無遞送料
東京神田表神保町三

本誌は學識と經驗とに富み而も婦人問題に熱心なる諸名家の贊助により誠實に女子の本會を完うせんことを心がけらるゝ淑女達の友たらんとを期し世の俗流に阿りて漫りに讀者の多からんとを望まず總べて不要の裝飾を省きて専ら記事の精撰に努め以て婦人雜誌たる品格を保たんとす●本誌は其欄を論說學藝修身齊家世務史傳譚章詞藻雜錄時事彙報に別ち普通に掲載する家政上文學上の記事の外に(一)科學の大意を掲げ學理の概念を得しめ(二)和漢名著の綱要を掲げ諸書の涉獵に便ならしめ(三)法制理財の事を平易にもものし著き時事を説明し内外の情勢に通ぜしむ●本誌は野卑なる言語又は劣等なる戀愛に關する文字を避け且つ賣藥其他下品なる廣告を掲げず●本誌は勤儉貯蓄の美風を獎勵せん爲に毎號慈善貯金切手を挿入して其模範を示す

第七號目次

(卷首筆蹟)鳩山春子筆歌かるた(論說)理想の日本婦人中島音樂學校講師○女子の職業に就いて添田法學博士(學藝)心理學大意島村抱月○論語九井文學士○法句經野原藍水○構文上の用意五十嵐力○美術一斑紀淑雄○作文批評今泉定介○作歌批評大口綱二(修身)女子の心得香雪女史(齊家)家政上注意すべき罰令談法學士H.T.○下婢の待遇に就いて石黒定美○改良女服仕立方渡邊東京裁縫女學校校長○家庭遊戲西川政憲(世務)經濟談伊藤秋南○鑛山の話石井相洋○各地産業の實況(史傳)英女皇傳下田歌子○國史上の婦人津田黃昏(譚草)暗流水谷不倒(詞藻)夏花三十題○みやび會員詞藻(雜錄)東海道汽車の旅喜田貞吉○皮膚の話川瀬ドクトル○圖案武千佐子(時事)時事偶感○女子職業の現況(彙報)迪宮殿下御移轉其他數件

(前付の二)

華族女學校學監下田歌子女史著 (每月一回發行)

少女文庫

全部六册 和裝上製

正 壹册三拾五錢 ● 三册
前金壹圓 ● 六册前金壹
圓九拾錢郵稅一册六錢

博學高識女流の名家たる下田歌子女史曩に家庭文庫全部十二冊を完成して普く女子の心得ふべき事項を網羅し懇切に其學藝を指導せられたり故に世上に此編を愛讀せらるゝこと他書の比にあらざり又少女文庫を起稿せられたり少婦兒女の讀本に備へられたり文詞莊麗挿圖又精妙を極む

第壹編お伽噺教草の挿畫は山中古洞氏の筆にて三十有餘面以て本文の説明を補ひたり第貳編庭訓お伽噺の挿畫は水野年方氏の筆にて廿五面を添ふ印刷鮮明紙質良好なり

第壹編 お伽噺教草 七月出版 第四編 外國少女鑑 十月出版

第貳編 庭訓お伽噺 八月出版 第五編 家庭の心得 十一月出版

第參編 內國少女鑑 九月出版 第六編 學校の心得 十二月出版

● 第壹編 お伽噺教草 この書は少女が家庭教育に裨益あらんことを希ふ爲めに、東西のお伽噺の中最も智徳の涵養に利あるべしと思ふものを摘み、猶其れを、取捨増減して綴りたるものなり、されば咄の趣考は極めて斬新なるもの多し。この書文章體は最も平易を旨として記したれば、側ら作文の初學びにも裨益あるべし、書中對話體は主として都の詞づかひを用ゐたれば、少女が對話の榮となるべし。なほ每卷みな同じ文體を以て記すべし。

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

諸博士
先生序文
巨理章三
郎君著

孔門之德育

洋裝菊版
定價金五拾錢
郵稅金六錢

本書孔子に依りて千古不朽の教育の眞理を明かにした教育の大精神是に依りて解は本書孔子に依りて知るを得べく一たび卷を開けば師愛し弟子相慕ふの間に甚深なる教化の行はれ置きて眞教育の恩光に浴するの想あらしむ今日の如く教育の精神萎微して徳教蕩然として自ら身を先哲の門下に育法研究の聲のみ識者之間に高くして未だ其目的の達せられたるも教育界に一大光明を加ふるべし教育者は更なり世の道徳に方りて本書の如きは孔子及諸弟子の傳す風教に志ある者本書を購ふて至重の典經と本書の如きは孔子及諸弟子の傳す

足立栗
園君編
纂校訂

日本道徳叢書

第壹編
定價金五拾錢
郵稅金八錢

要次目

- 〔武士訓〕これは井澤蟠龍の著、武士日常の道徳を説く者言の
- 〔六諭衍義大意〕これは室鳩巢の和譯したる者
- 〔都鄙問答〕これは石田梅巖の著
- 〔父子問答〕これは小柴武雄の著
- 〔會友大旨〕これは手島堵庵の著、心學か三教を折衷せし趣は此
- 〔袋〕これは西川求林齋の著、商業道徳が如何に近世に

發行所

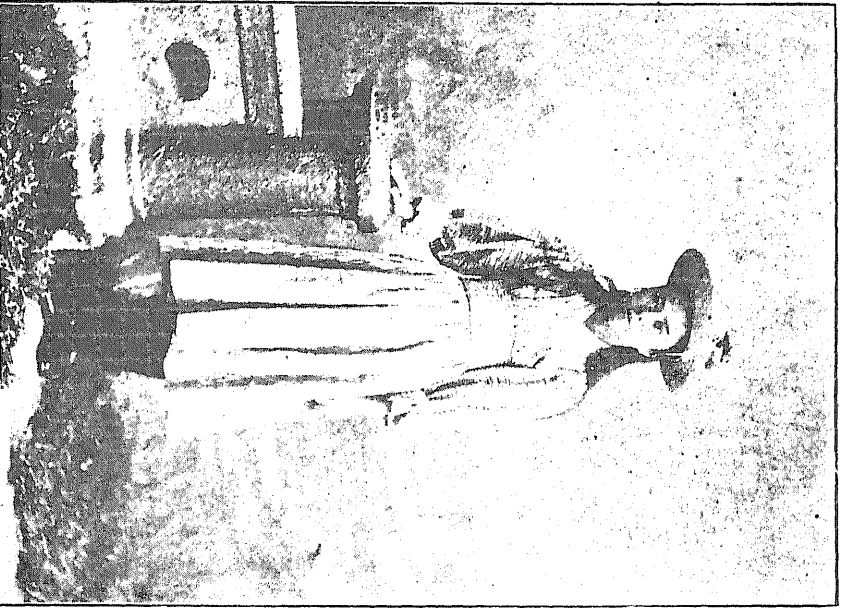
東京市神田區美土代町二丁目
一番地(電話本局二四二〇番)

開發

社

(前付の四)

服 人 婦 良 改



婦人と子ども

第一巻第八號

(明治三十四年八月五日)



うらしま。
 やれく かわいいそー
 だった。
 さー これから どこえ
 など かってにおよいで
 ゆきなさい。



(本欄は凡て
轉載を禁ず)

とんぼ

作曲 太田信吉



トンボ ヨ トンボ ミナカラ トンボ

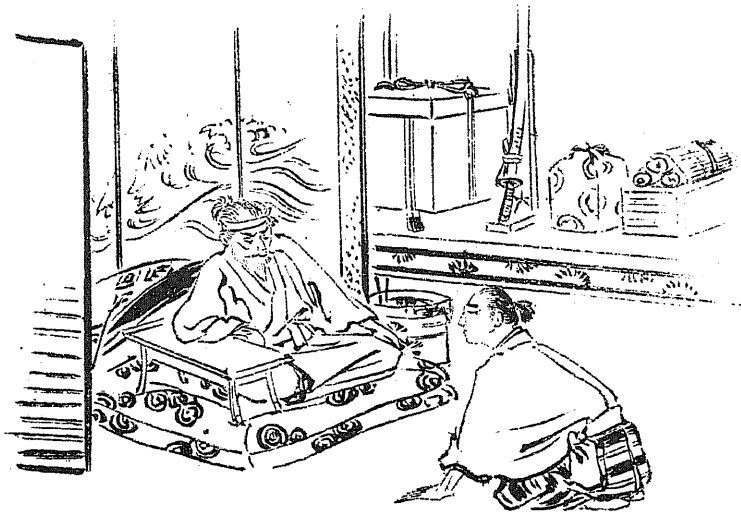


トンボ トンボ ヨリ ナ
トノ トコニ トマレ



ヒナタラ アツイ カゲ デ ヤスメ

ひ	ひ	も	と	か	と	
か	な	と	ん	ら	ん	と
げ	た	の	で	と	ぼ	ん
で	わ	と		ん	よ	ぼ
		こ	と	ぼ		
		こ	ー		と	
		に	く		ん	
					ぼ	
や	あ	と	ゆ		し	
す	つ	ま	く		を	
め	い	れ	な			



丈助の忠義

やまとの翁

むかし、一人の殿様が
 ありました。ある時ひどい御
 病氣にかゝりまして、も一所
 詮命が助からぬと思いまし
 たから、丈助とゆ一忠義な家
 來を枕元に、よんで言置きを
 致しました。

「あ、余も今度わ、も一助、

からぬ。これからわ　どーかお前が余に代つて　若
 の身の上を氣を付けやつて下され。それから　余が
 死んだら、若を連れて御殿中の室から庫から　残ら
 ず見せてやつてくれ、然しあの廊下の向側の室だけ
 わ　見せてわならぬ。其譯わ、あの室の中にわ　黄
 金國の王女の繪姿が　かゝっているのて　夫を若に
 見せると　いけないのだ。これわくれくも　お前
 に頼んで置く。」

夫から殿様わ　間もなく逝去りました。夫で丈助
 わ遺言どーり若殿様を連れて　御殿の室から庫から

残らず案内しましたが、長い廊下の向側に行きましてから其室だけわ見せないのです。

若殿様わ 不思議に思し召されて「これ丈助 他

わもー残らず見せて呉れたのに、この室だけなせ

見せてくれないのだ』と尋ねました。夫で丈助わ

大殿様のご遺言を話しました所が、若殿様わどし

てもご承知しない。「見せてくれねば、いつまでも私

わこゝを動かぬ』と申されて、どーにも致し方がこ

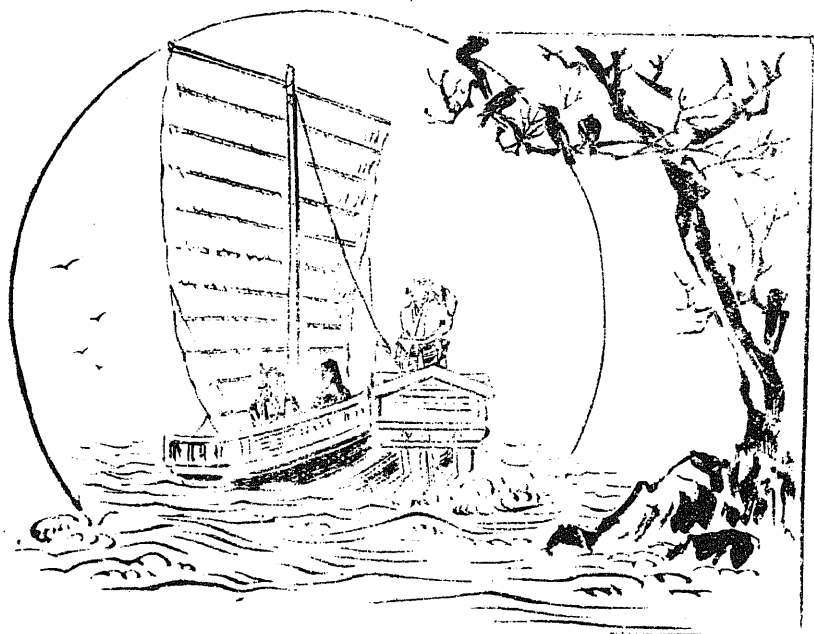
ざいませんから丈助も 決心致しまして「あ、是程

までにお話してもお聞き入れがなければ、是非もな

い　ご覽らんに入いれた上うへで　何か事ことでも起おこれば　また勘かん辨べんもあるたる」と考かんえましたから　と一いく其そのお室むろの障かざりを明あけてご覽らんに入いれることにしました。

すると、其その中なかには、まことに奇麗きれいとも何なんとも言いえない立派りっぱなお姫様ひめさまの繪姿えいざが　懸かつて居いました。若殿わかご様さまわ一目見ひとみみた許よかりで「あつ」と仰おつつた切り御言おご葉はも出でませなんだが　暫しばらくしてこのお姫様ひめさまわ　黄金國おうごんこくの王様わさまの女むすめだとゆーことを丈助じやうすけから聞ききました。

そこで　何なんでもこんな立派りっぱな御姫様おひめさまなら　どーかして　自じ分ぶんのご殿ごんえ　お迎むかえ申ましたいとゆーので



早速 お船をしたて、丈
助と二人で お迎に参り
ました。

で、都合よく お姫様
をお迎えになつて 若殿
様わ大喜びで もとのお
船に乗つてお歸りになり
ます。

丈助もやつと安心しま
して一人上の方え來て

そこいら見ていますと 向の方に 烏が三羽木の枝
 に留って しきりに何か咄しをして居ます。「はてな
 何を言ってるのか知らん」と思つて聞いて居ますと
 一羽の烏のゆゑにわ、

「かーく、 殿様がねー 今度お姫様をお迎になつ

たが お可愛相にお二人が一所にゐることが出来
 ないのよ」そーしますと二番目の烏が「かーくど

ーして」と聞きます。すると前のが「かーくそ

れわねー 今お船が岸えお附きになると どこから

か立派なお馬が出て来る、 殿様がきつと 夫にお乗

りになる　そーすると　其お馬わ　すぐ風の様に
 空え　かけつて行つて　夫つ切り殿様わ　お歸りに
 ならないのよ」

これを聞いて丈助わ　ぎよつと仕ました。けれど
 も騒がないで　ヂット聽いて居ました。すると又
 二番目の鳥が「かーく　可愛相だねー　助かる工
 夫がないのか知らん」そこで前の鳥が言にわ「かー
 かー　あるともく　夫わねー　其お馬がでて來た
 時　誰かすぐ鐵砲で打ち殺して仕舞えばいいのよ、
 併し其事をいつた人わ　足の指尖から腹の中央まで

石になつて行くのだわね」

丈助わこれ聞いてやつと安心しました所が又

鳥の話が始まつて、三番目の鳥が言にわ、「かーく

夫でも矢張だめよ。とゆーのわご殿えお歸つてか

らご婚禮の場でお姫様が病氣が起つて青くなつ

て死んで仕舞うのだよ」

これにわ丈助も驚きました。一つ逃れて又一つと

わこれのこと はてどししたものと胸を痛めなが

ら尙黙つて聽いています。すると其鳥が「けれどそ

の時誰か一人殿様に知らさないで お姫様をそーっ

と抱いて来て お姫様の胸から血を三滴だけ吸い取
れば助かる。けれど 夫を言った人わ 腹の中央か
ら 頭の頂まで石になって仕舞うのよ」そこで三羽
の鳥が一度にかゝくくくと鳴いて 大空はるか
に飛んで行きました。

「さうとんだことになって来たわい 殿様をお助け
もーしてお二方をご一所にするにわ 是非とも我身
を石にして仕まわねばならぬ。あーしかたがないわ
何も忠義のためだ。これわ一つ自分の身を石にして
主人をお助けもーさんければならぬ」

健氣にも丈助わ　こゝと決心して　岸につくの
 待つて居ました。

殿様とお姫様とわ　夢にもこんなことがあゝと
 わ存じませんで　お二人面白く船の中でお談して居
 られる中　船わだんく　進んでとうく　岸えつきま
 した。

丈助わ鳥の話したことが　今にやつて來ると思つ
 ていますから　中々油断しません。筒に丸こめた
 一撃と手ぐすね引いて待つて居ます。

やがて殿様がお姫さまの手を引いて　お二人で御

一所に船から岸えお下りになると、これわ不思議！
 どこからとなく、忽一匹の立派な逞しい馬が、すの
 くと岸え立顯れました。で、殿様わこれをご覽にな
 って、「や、これわ立派な馬だ、一つこれに乗って
 城え歸ろ」と仰せられてやがて其馬にお乗りにな
 るるとゆゝ時、忠義な丈助わ一生懸命、こゝぞと筒
 とり直して、「づどん」と一發、馬わ忽そこに斃れま
 した。

殿様わ譯をご存じないから、「丈助、お前わ何を
 するのだ」とお咎になりましたが、不斷からの忠義



をよくご存じだから
だ夫丈で別にお叱りもな
さいません 丈助も亦其
譯わ 申し上げない。
さて間もなく御殿え
お歸り遊されて さーこ
れから 御婚禮だとゆー
ので御殿中わ 大騒です。
で、其晩になりますと
お二人わご立派に御装束

をなすつて正面しやうめんの間まにおつきになる。お客様きやくさまわす
 ーつと下したに并ならんで居まりまして、皆みなお目め出でたいくくと
 お祝いわいを申まして居まります中に、丈助ぢやうすけ一人ひとりわ 烏からすの咄はなしが
 ありますから、それどころでわありません心配しんぱいで心
 配ほいで堪たりませんから、始終しじゆう氣きを配くわつて居います。

(つゞきます)



室内遊び

紙の切り方

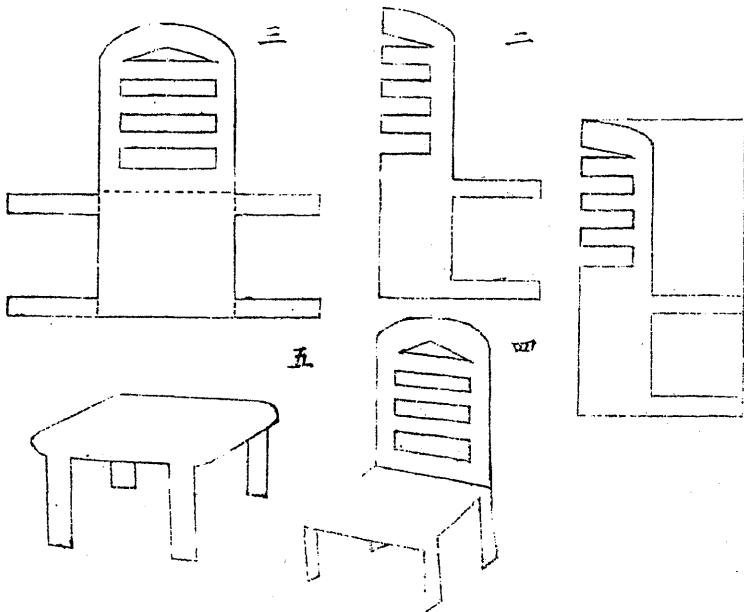
厚いま四角の紙を二つに折つて、一圖のよりに、鉛筆で線を書いて置いて、其の線の通りに、切つてごらんなさい。

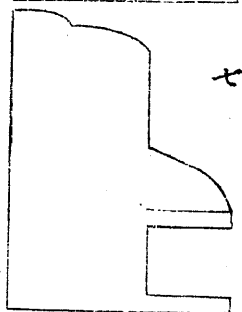
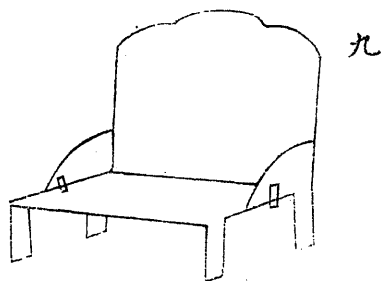
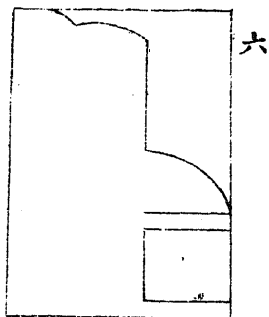
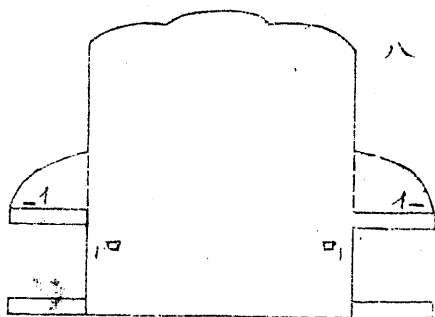
切れましたら、ひろげて三圖の、點線の通りに折り目を付けて、四圖のよりに、立て、ごらんなさい。

くら椅子が、出来ましたらう！

今度は、テーブルを拵へましょ！第五圖は、テーブルの出来上つた所ですが、これは考へて切つてごらんなさい、やはり二つに折つてするのです。

それから一つ、長椅子を拵へてみましょ、それは前の椅子よりも、大きな少し横長な紙で、





それをたてに二つに折つて切るので、切り方は六圖でわかりましょー！

切れましたら、八圖の點線の通りに、折り目を付けて、イとロとの所へ、切れ目を入れて、切り屑の紙を細く切つて、それをさしてとめるのです。

出来上りましたら、剪刀のむねで、よりかゝりの所を、少し後にそらせると、よい形になります。

戸外の遊び

蜻蛉とり。(ほんとに取れる)

夏の遊として、お子たちに最歡迎せられるものゝ一は、確に蜻蛉とりでしよー。

蜻蛉とりの方法で、一番普通に行はれて居るの
はまづ (一) 雌の蜻蛉を糸で、くゝつて夫を、棒

の先に繫いで、日中畑の邊へ出て、其邊を飛び廻つて雄を釣るので、これはどこでもやつて居る様である。但し、この方法では、無論雄の蜻蛉より他は取れない。二は、長い竹の尖つたのにトリモチをつけて、夕方澤山の蜻蛉が、飛びあつて居るのを滅多無性に粘着けるので、これも所に依ると行はれて居ないでもない。

そこで、翁が今お話ししようと申すのは、前の二法よりは至極簡便で、中々面白くつて、併も頗る運動になる方法なのである。

簡單なと申せば、道具といつて、たいお母さんや姉さんの髪の毛の一寸四五寸許りなのを一本抜いて戴いて、夫から小豆粒大の小石二つを拾つて一づゝ小さな紙片に包んで、さて夫を、髪の毛の兩端に確固と結び付ける、それで道具が出来るので

す。

却説、今頃になりますと、夕方からして、澤山な蜻蛉が出て来て、蚊を食べに来る。所に依りますと、殆ど一面が、蜻蛉で以て覆はれる様なことがある。そこで以て、例の髪の毛を用意して行つて、恰ど一匹の蜻蛉が飛んで来る程を計つて、それを上に抛げ上る、すると蜻蛉は、確に夫を蚊か蝶かと思つていきなり食べに來る、咬へたと思ふと忽、髪の毛がもつれにもつれて、蜻蛉の身體に纏はつて、十重二十重にからみつく。翼ともいはず、足ともいはず巻き付いて仕舞うので、蜻蛉はアナヤと許り、空から落つこちるのである。

甘く行くと、これで以て一晩に二三匹から十匹以上も取れる。が、時に依ると、小石があまり軽すぎると、或いは又、からみ具合が、よくい

かなかつたために、かゝるわかゝつても、蜻蛉先生悠々として、小石を兩方にブラサゲて、虚空遙に飛びさることがある。

小石の代りに、大豆を二づ、水をつけて磨り合せて、クツつけて、暫燥して固くなつた所で、

そのまんなかを、髮毛で以てくゝつても宜しい。

併、時々持て行かれる恐があると、また、抛げ上る際に、紛失する憂があるからして、道具は是非とも二つ以上も造つておかねばならぬ。

この遊びは、紀州の或地方で、夏の夕暮、盛に行はれる。他では一寸見つけないが、中々興味があつて面白い、子供は勿論大人にても。やつてご覧なさい。確に取れることは受合ひ。



惠の滴

やまとの翁

プロシヤのフリードリッヒ二世と申し奉つるは、西暦千七百四十年から、凡五十年間も、王位に居られました。が、通例フリードリッヒ大王と呼ばれましてプロシヤ唯一の明君だつたと申すこととてございませう。

此大王に付いては、面白い話かまことに澤山ありませうが、次の話が其一であります。

或日のことでした。王は、玉座に在して鳴音高く呼鈴を引かれました。が、どーしたものでしたか、誰もお座近く伺うものがない。そこで王は、ご自身お立ち遊ばして、次の間へ出てご覧遊ばされました所が、給仕がたつた一人椅子によりかゝつて居眠をして居ます。王はすぐ呼び醒さうかと覺

し召されたでしたが、恰其時給仕のポケットから、何か字の書いた紙片が出かゝつて居るのが不圖お目に留りました。王は

「はて、何であらうな」

と覺し召されて、ポケットからソート引き出して、ご覧になりました。

所が、それは給仕のお母さんから贈した手紙で、その中には次の様なことが書かれてありました。

「お前がお上から戴く月給を節して、毎度〳〵私へお金を送つてくれるのは、まことに有り難い。

お前のお蔭でおつかさんは、始終樂に暮して居ます。どうか王さまへよく御忠勤をして、神さまに仕へる積りでお前の身體を王様にお捧げなさい。すればお前も、きつと幸福になりますから」

そこで、王はまた静にもとの玉座にお歸になつ

て、五圓金貨一個をおとりになり、前の手紙と一所に、またソートと給仕のポケットにお入れ遊して置れました。

で、今度は急に呼鈴を烈しく鳴らされました。

給仕は、この音で忽目を醒し、玉座近く伺候致しますると、

「お前眠つて居つたな」

王がお咎めになりました。給仕は、ハツと恐れ入りまして、

「陛下、まことに申譯がござりませぬ」

とお謝罪を致しましたが、どんなお叱りを蒙ることかと小な胸は、一方ならぬ混亂を來しました。が、其際不圖ポケットに自分の手を差し入れた所が、手に觸つたのは、たしかに金貨でありましたから、給仕は愕然として、これを取り出し

ましたが、見てる中に顔は眞青に變はり、兩方の眼に、涙を一杯溜めたまゝ、黙つて王を見上げ奉つりました。

で、王は、「あゝイチラシー若者よ」と覺し召されましたが、一向にお氣の付かれぬ御氣色を装はれて

「どーしたのか」

とお尋になられました。給仕は恭々しく膝まづきながら、聲を振はし

「わー陛下、誰かが微臣を陥れ様とします、微臣は此お金のことは、何にも存じませぬ。」

王は

「おー、神を信する者には、神が眠りの中にお授け下される。それは、神の賜じや。早速それをお母さんに送つてやれ、そして朕は、これからいつも

お前ら親子を心に懸て居ると申し遣はして、早く安心させるがよし」

今のままで、一方ならぬ苦悶に胸を痛めた給仕は、このお情け深い主君の賜とお言葉とを拜受して、忽筆や言葉に述べ盡せぬ喜びに心を躍せましたが、此から後は、益々一生懸命に忠勤を勵みましたとのことでござります。

前號考へ物の解

(一) いる時のいらぬもの、いらぬ時のいるものは

答 風呂の蓋

(二) 世の中に、眞直でたてぬものは、答 屏風。

(三) 頭がなくて帽子あり、足あれど靴なし、答 菌子

(四) やり違ひの紐は 自分で出来るでしよー。

この次の考へ物

- (一) Utae (結付る)といふ言葉の中、一字だけ置き代へると全く反對の語になります。あてゝごらん。
- (二) 自分のものであつて、自分よりも自分の友だちに多く使はれるものは、なんでしよー？
- (三) 春の高い人は、いつも怠者だといはれる譯は、なぜでしよー？



家庭



子供を叱ることに付きて

ふみ子

兼て待ちもうけて居た夏休も來ましたので、去る十日には愛らしい兒等と、しばしの別をつけて歸宅いたしました。處が休になりましたからは、ほとんど連日降りつゝいて居りますので、引こもつて、かれこれと用事をかたづけて居りましたが今日は、めづらしくも好い天氣になりましたから勇みたつて、さる知人を訪問するために、出かけ

ました。そうして道で、ある紙屋に立ち寄りました。

此の紙屋の店さきには、七つ八つ位な男子が餘念なく西洋紙の色紙の細長い断屑を持つて、切りに、びら／＼と振り廻はして居りました。其傍には阿母さんらしい人が見えましたが、この人は私が買物にまゐりましたものですから、急に立ちあがりました。

すると、いきなり、大聲で、

「何ですわ、うるさい、あつちにしまつてお

いで」

と、ひどく／＼叱りつけました。

しかられた子供は、びつくりして、ちいさくなくて奥の方に飛び入つてしまいました。しかし、また出てまゐりまして、まもなく、遊びはじめま

した。

私は買物をしまつて、金を拂ひました。此時他に三人の客があつたものですから、阿母さんは子供に

「あちらで、おつりを十銭もらつておいで」

と、いひつけました。子供は

「いや／＼」

と、のみうて動きませぬ。そうすると、阿母さんは何か、つぶやきながら、客をほつて自らたつて行きました。

この子供は二つの場合に付て、どんな感を持つたでせうか。前者は後者よりも遙に悪い事であると思つたに相違ありません、何せなれば二つの場合とも阿母さんは喜ばぬ風でありましたが、同じ喜ばぬ中にも、其顔色といひ、言語づかひといひ、

前者の方が餘程はげしかつたのであります。

すべて、幼児は何によつて、これは善い、あれは悪いといふことの見わけを付ける様になるのでございませうか、申すまでもありません、阿母さん方のおしめしになる手本によるのが第一でございます。即ち阿父さんや、阿母さんの、おつしやること、なされることは何でも善いので、そうない事は悪いとおもひます。次には同じ善い事、また悪い事でも、其ほめられ方、また、叱られ方によつて、善悪の度合を知るのでございませう。即ち常ならぬ顔色や言葉で、さとされ、また叱られた事は、極々悪い事であると感じますが、さもない事は、それ程にも感じません。

そうして見ると、まゝ、心なくなされてある叱るといふことは、實に幼児の訓練上大なる關係

のあるものではございませんか、決して／＼輕る輕るしくしてはなりません。また、自分の一時の機嫌にまかせ、感情にまかせて、わけもなく、ふるまつてはなりません。

まづ、氣を平かにして、これは道德上の善であるか、悪であるか、また善悪何れにもつかぬことであるかを知ることが必要でございませう。さて、愈悪であるならば悪として重いか、輕いかといふことを知らなければなりません。そこで悪として重いものであるならば、顔色をかへ、言語をかへて、しつかりと、さとし、また叱るのでございませう、其代り善とも悪ともつかぬことを悪として取扱つてはなりません。

私は紙屋の阿母さんの叱り方は、丁度、反對であつたかと思ひます。子供が阿母さんの言ふこと

を聞かぬのは悪い事で、紙を振り廻すのは善でも悪でもありません。ですから後の場合こそ、さとしもし、叱るべき時で、はじめの場合には、だまつてはつて置いてよいのであります。但し、たとひ後の場合でも、多くの人前で、さとしたり。叱つたりすることが、よいか、わるいかといふことは別問題でございしますが、とにかく前の場合に顔色をかへ、言語をわらへ、けて叱ることはいりません。紙を振り廻すことは悪いことではありませんが、若しやめさせやうと思ふならば、和らかに言つて聞かせばよいので、悪として取扱つてはなりません。

私は、今、氣の毒にも紙屋の阿母さんを例にだしました。これは誰しもあやまり易いことでございしますから、多くの子供を世話して居る我々、

また子供を持つて居る阿母さん達は、大に氣をつけなければならぬこと、思ひます。

曉の目をさませとや蓮の花

子供は

ひさ子

子供は即ち子供であつて、大人ではありません。ですから大人とちがうところが澤山あります。身心がまだ大人ほどに發達して居らない、といふことは、之は今私が申すまでもないことでございしますが、この大人ほどに發達して居らないといふところが、子供の子供たるころ、子供の愛すべきところ、教育に十分氣をつけなければならぬところかと思ひます。私は今思ひつき次第に、子供はこんなものと思ふことながらを申しませう。但し六か

しい理論上からわりだしたのではございません、順序なく私の見たところを申すのですから、其おつもりで御覽下さい。

●子供は無心で無邪氣で神聖なものです。「丁度白糸のやうなものである」と昔の人の言はれましたのは、なるほど、思ひます。習慣は第二の天性と申しますから、このけがれて居らない子供は、育て方や境遇に由て、實にいろ／＼の色糸になるのである、と思へば子供の教育は、一分一秒の注意も怠らず細かく氣をつけなければならぬものでございます。少し油断して白色の物を取り扱ふとすぐ手垢がついたり、他の色がついたりするやうなものでございます。私は今毎日午後、白糸で編んだ揺網の中に眠つて居る二歳の女児の寝顔を見たりしますが、其潔白な神聖なことを感じます。

今此兒は、世の中の偽も不親切も怒も悲も知らぬのであるが、幾年かの後はどんな女になるのであろう大人になつても、心は此網のやうにきれいであらうか、なまづ／＼行末を思ひやつて居ります。

●子供はよくまねをするものです。かつて私の姪が、私の水入さへ見ると、水の出口で碗を叩きまします。そうしてある時、とう／＼其水入をわつてしまひました。此水入は、ある人がはる／＼遠方から送て呉れたのでしたから、誠に残念に思ひました。併し之は子供がわるいのでなく、全く私がわつたのと同じです。なぜならば、私が水が少くなつた時に、不性をしてコツ／＼と出口を硯につけて出しましたのを、ちらと見ましたから、それから水入さへ見れば、たゞくものとも思つたので

せう。ほんとうに子供は善悪の差別なしに何でもかでもまねますから、何時の間に周囲の人、殊に自分に参加する人のわるいくせまでも、まねて居るかも知れません。自分が、しらすくゝわるいことを見せておいて、子供が其通したからと言つて「なぜそんなことをする」と叱るやうなことがありましたならば、それは無理です。

●子供は割合におぼえのよいものです。尤も子供にもよりますが、遠い前のことを、昨日わつたこととやうに話し出して、大人を驚かすことが時々あります。去年わつたことも、一昨年見たことも、昨日とか、昨夜とか言つて、得意になつて子供が話をするのは、誠に罪のないものです。まして明日こうであつたとか、明後日こういふものを見たなど言ふ子供もありますのは、時の關係も名稱も

分らずに、記憶して居ることが分ります。おぼえて居なくてもよいこと、とんだことまでもおぼえて居つて笑の種を蒔くのは、どこの子供にもよくあること、思ひます。それにしても、心のかたまたらぬうちには十分氣をつけて、悪いことを見聞させないやうにしたいものです。

●子供は正直なものです。少しも人を疑ひませぬ「今度淺草に行つたら何々を買上る」など言つておいて淺草に行けば、子供は大人よりもさきに思ひ出すでありませう。之はおぼえがよいといふこともありますが、一體子供自身が正直で不善を知らず、従て▲の言葉を専心に信ずるからでありますところが、此正直な疑を持たぬ子供が年月のたつにつれて、だんくゝ人を疑ふやうになり、不正直の種が心に蒔かれ、進んで不正直なことを云

つたり行つたりすることがあります。即ち、言行に少しの裏表がなく、天真爛漫な子供が、無邪氣でない人を疑ふ愛らしくない兒になるかも知れません。之はなぜでありませうか。決して子供の罪ではありませぬ、大人が不正直なことをして見せたり、かろ／＼しく約束してそれを實行しなかつたりするからであります。

●子供は無經驗で大人ほど物が分りませんから、物事を奇妙にまちがつて解釋することがあるものです。ある人が、ある時子供等に、冠を着た清正が馬に乗つて居る畫をかいて見せました。すると一人の兒は「此清正には角がありませんネー」と申しました。此兒はかぶとの鍬形を角と思つたのでせう。して見ると子供は物事を見聞して大人が思ひもよらぬまちがつた解釋をして居るのか

も知れませぬ。

●子供は活動と自由とを愛するものです。そうしてこの二は子供の身心の發達上、極めて大切なこととございます。之に由ていろ／＼經驗したり、さとつたり、勇氣を出したりして進歩するものとございます。「私方の子供はどうも臆白で、少しの間もじつとして居りません」。「いやもう困つたもので、少しも油斷ができません、一寸でも目をはなすと何をしだすか知れませぬ」など、いふ泣言をきくことがあります、之は子供の自然ですから、うるさがり面倒がるべきではありませぬ。尤も法外の自由と活動を許しすぎては、害になることも起りますか少くともできるだけの活動と自由とは許してやらなければなりません、子供を大人のやうにしづめておかうといふのは、無理でもあり

且つ害にもなりません。

夏の飲み物

孤帆生

燃ゆる火を消すには盛に水を注ぐべく、熱せる物を冷さんには氷の中に包むべし、いふまでもなきことなり。されど三伏の暑さに得堪へて水を嚙ぢりて凌がむとするは意氣地なき限り、氷をのみて涼しく感ずるは内部に入りたる氷が溶解する爲に體温を奪ふ故なり、解けたる多量の水分は食物の消化に必要な胃液の作用を鈍らし、甚だしきはいたく體温を減じ寒胃をさへ惹起すとあり、ラムネを飲むで渴を醫せんとするも賢からぬ仕方なり、ラムネはクエン酸又は酒石酸に炭酸瓦斯を溶かしたるは尙可なれども今の市中にひさげる

ものは炭酸曹達に硫酸を加へ發生したる炭酸瓦斯を砂糖水の中に溶かしたるものなり、飲みて涼しく感ずるは體の内部にてラムネの液中の炭酸瓦斯が揮發する爲に熱を要し體温をとるによる、ラムネの品質の悪しきは胃を損ふと水よりも甚だし、生水にも亦油断すべからず、井の水、泉の水など如何程清淨なるものなりとて妄に多量に飲むべからず。

盛夏に氷もて冷せる食物を食ふは物識れる國民にも行はるゝことなれど、そのまゝの水をかぢり多量の冷水をのみ等は全く野蠻人の仕業なり、妄に非常に熱きものを嗜む者は病人なると同じく、非常に冷たきもののみを求むる者も確かに身體の病態を自白せるなり。

健全なる國民は少くとも盛夏中湯を以て満足す

るものなりざるべからず。

茶は我國民の上下一般に用ふるものなれど、之も量過ぐれば心臟の鼓動を激しくし胃の消化作用を害するものなり、品質の上等なる程此害殊に甚しとす。

唯番茶のみはその憂少しもなし、凡ての刺激物に對して十分保護を與ふべき小供の飲料としては此無害なる番茶など適當のものなるべし。

麥湯亦無害にして殊に宜し、先づ頃北清の戰役に從事せし我軍隊に之を採用し居たるを見て、久しく良好の飲用品なきに苦心中なりし歐米各國の軍隊は、競ひて麥湯を飲用するに至りしといふ、始めての人には一寸嗜まれぬ向もあれど砂糖など加ふればなかなかよろし。

子供の爲に殊に注意すべきは、晝の眞中、さて

は劇しき運動をなしたる後などなり、斯かる場合には前後も辨へず飲むものなればなり、如何に良好の飲料なりとて度を過せば之亦益なきのみならず害あるものなることを忘るべからず。

蜻蛉や何の味ある竿の先

今昔いろいろは料理 (ほ)

石井泰次郎

法録煎餅の拵方

米の粉 一升 せめのこ 十四匁

もち米の粉 三合 さたう 十四匁

右を水にてこね合せて、蒸籠にてむして、形状は好次第に切りて、日にからりと乾して、其後焙爐にてはしやげてつかふべし、又薄くのばして花形のもやうなるやきがたにてせんべいの如くやきて

もよし

ほんぼりみる喰の拵やう

みるくひ貝よく湯煮して布にて包みて、上より打てもみほぐし、ふくめたるなふくめといふの様になる、又口の赤みの所はほぐれず、其所はずぬぶん細にたゝきて右のふくめの内へませてよし

ほし海扇つかひやう

ほしたるほたて貝は指にて極めてほそくさきて水にひたしおき柔らかくなりたるを、水より取上て酢醬油にて味をつけて、又味噌の煮返したるをも少しくはへてもちいてよし

穂蓼つけやう

八月頃よき時分、桶に鹽を少しぬり穂蓼を次第にならべて少づゝ鹽をふり、おもしろしをかけ、一ときばかりすぎて、めしのとり湯一升到鹽五合ほどかき

ませてひたしくになるほど入ておもしろかけておきてつかふとき洗ひて出すべし

看護法 (承前)

醫學士 長瀬復三郎

斯ふ云ふ疾病に罹つた子供を見た時は必ず先き御話をした胸圍、頭圍等を計つて見ねばならぬです。一寸見た模様病氣に罹つて居る外見上、ドウ云ふものであると云ふに子供に病氣があると云ふ事について子供が機嫌が悪ひと云ふ事は一番に見た所で氣の付く事で、健康なる子供であれば、實に爽快な顔をして天真爛熳と云ふ有様で能く遊びもなし、アヤせばよく笑ふと云ふ工合であります、又光線音響とかさう云ふものに向つて、或は見ずしらずの人に對しての感覺が病時の如く

に頭敏でない、四五歳の子供の顔の色を見て顔付が腹膜炎とか肺炎とか云ふ病氣を有つて居るものは疼痛があるとか云ふ事が顔色に現はれて居る、又慢性の病氣で腸加答兒とか胃加答兒があるものは大變疲勞したやうな苦しみのあるやうな顔をして居るものである、又腦膜炎のやうな子供であれば容貌が變つて仕舞ふて無慾の状態を呈して居る、萎縮などの子供を見れば子供か老人か判らぬやうに顔に皺が寄つて居る。

又子供の泣聲、それも大に關係する、子供の泣くは教育が悪くて我儘の子供は別であれども赤兒にしても大くなつてからでも、泣くは何か不愉快な事があるからで、其泣聲が子供は唇で大なる聲を出して持續性に泣くものである、高い聲を以て泣く時は乳が欲しいとか、飲み物が欲しいとか云ふ

有様を現はして泣く、其聲は高い調子でなくして聲がカスつて居るとか、其泣聲が續かずして切れ／＼に泣くとか云ふ時には、痛みでもある時である。斯う云ふ事は申さぬでも犬が驚いて吠ゆると、泥棒を見てなくと、火事の半鐘を聞いてなくと、判るやうに子供の泣方も判るものと思ふ、聲が枯れて居ると喉頭の病氣、實扶的里亞の様な咽喉に異状のある事が判る、又高い聲を出して泣くけれども號泣して四隣に響き渡つて、すかしても聞かぬやうな事は腦水腫のある子供にある、クルーゾと言つて昔云ふ馬痺風、彼の病氣になれば丸で聲が出ぬ、又肋膜炎とか腦膜炎とか云ふものになれば聲を出せば痛みがあるとか苦悶があると云ふ所から聲を出さぬ有様もある、又腦に病氣があれれば何か物に驚き易いと云ふ模様で同じやうな言葉

を繰返すと云ふ事もござります。

皮膚の色光澤にしても、少し病氣であれば色光澤の赤い色が無くなつて、速に衰弱の模様が出て来て皺が出来るとか或は尋常に異なつた色光澤を現はす、重症の腸加答兒でもあつて、多く下痢でもした子供は色光澤も悪く、脂肪分も缺けるから眼も早く凹むとか、色も悪く、手足も血液の循環が悪くなつて冷たくなる、黄疸のやうな病氣ならば結膜とか、皮膚にしても唇にしても黄色を呈して來ますし、又傳染病の格魯布の呼吸困難のつゝ、く時としても或は血行病でもあるものは「チアノーゼ」(紫紅色)でも現はるゝとか、神経系統の疾病には皮膚の知覺が過敏になつて何處に障つても痛いとか、又麻疹とか猩紅熱とかさう云ふものになれば斑點狀に赤い色が出て來る、兎に角皮膚の

色光澤も一のより所となる。

(以下次號)

或母の日記 (第三回)

無名氏

生後七八ヶ月間の記事

(即ち三十四年四月より五月に至る)

三月中旬、母の實家に行き滯留すること一ヶ月、四月十二日に歸り來る宅につききて、父や婆さんを見て知らぬと云ふわけか泣きて大に困らせた。次ぎの日平生親しくゆき、せる某の家に至る。又人々の顔を見廻はして泣く。此くの如くして五月の末に至る、六月に入りてより他人を見ても泣かぬやうになれり。

母の實家より人形三つがらゝ布袋等の玩弄物を貰ひ來る、宿の婆さんよりもがらゝ一つ貰

ふ。

四月十六日（生後二百日）體重を計る、壹貫六百四十目なり、此頃より暖氣加はり室の内さびく戸外は暖かにして心地よろし、故に室内にあるときは機嫌あしくして泣き野外に出づれば喜びて笑ふ、つとめて戸外に連れ出づるやうになせり。
 十九日婆さんが銅貨大の菓子ばんを預けしに半分程吸ひとしたり。

二十二日はがき其他の文字を見て何か讀むまねをなし大に笑はせたり。

此頃より牛馬を見て嬉しがり、又雀大猫の鳴き聲を聞きて喜べり、殊に子供の遊び戯るゝを見るときは大に喜べり。

五ヶ月目にて獨坐する事できたりしが、二ヶ月を経たる只今にては、頗る上手になり、たをれん

として調子をとれたをれずなりぬ。（凡そ三十分）
 頭其他を物に打ちても少々事にては泣きし事なし頭が餘程堅いと話しあへり。

四月二十九日夕食の側にありし膳を引張り、又は押出しなごす。

五月四日大根漬を吸ふ、又始めてがらくをふりてならず、此頃の眠る時間は凡そ十二三時間なり。

六日仰向きより腹匍ひに起きかへれり。

八九日頃より他人の出したるものを兩手を出して取り直に口に入る、過ちて下にて落しても知らずして手のみ口に入る。

此頃毎日だゝを云ふて母を苦めたり。

五月の中旬よりお出と呼べば兩手を出す事を覺えたり、此頃母の見ぬ間に三尺程外にすり出した

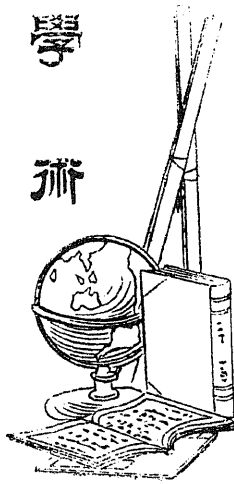
り。

十九日在郷軍人の演習を見物に連れ行きたり

ひとへなる蟬の羽衣夏は猶

うすしといへどあつくぞありける

學 術



夏の海邊

東 海 生

海岸のひろくとした處の、波靜に白砂を洗ふ
磯のほとりて、散歩するのは、實に愉快である。

殊に夏の海岸と來ては、又一層である。海岸は山
手の方や町中よりも、餘程涼しくつて空氣が清潔
であるのだから、身體の爲になることは、非常な
もんだ。夏を海岸で暮す丈でも、この様である
が、此上毎日二三度も海水浴をやるものなら、御
飯のいけることは、常の二倍にもなり、身體の色
は、赤黒になつて、丁度、船頭の子供を見た様に
なる。

身體の色の黒くなるのは、衛生上大變にいゝの
である。例令ていへば、家の中とか、木蔭に生長
する草は、青白い、なよ／＼した形をして居るに、
日わたりのよい所に生えてる草は、丈夫で黒青い
色をしてると同じことである。

夫から氣分がさわやかになつてくる。これまで
東京のような、家の密にこみあつてる、塵芥だら

けて、時々變な臭氣がやつて來る様な處に居つて絶えず、頭痛がしたり、脚氣に苦しんだ様な人でも、海邊へ來て、磯の波に足をぬらしながら、親友三四人とはるかのあなたを眺ては、四方山の咄をし、或は貝を拾ひながら、散歩すれば、どんな病氣もよくならぬことはないといつてよい。

海岸に居つて、時々海の方を眺めて居ると、時々海の水面の色が變つてくる。天氣のよい日の夕方、西の方に、少し雲のあるときは、海の水は眞紅になつて丁度赤インキを流した様である。けれども天がかけ曇つて、今にも夕立の來そうな時になると、海水は一面に灰色になる。また大風雨があつて、まだ天も晴れない時は、大波が起るので海の底までもかけ廻すから、全體が眞黒に墨を流した様になる。それに引き代へ、天氣清明にして

一點の雲なく、日本晴ともいふべき時であつて、海の水が澄み渡つた時は、眞青であつて、丁度夏の朝田甫の間にある稲葉の青々と露をもつてゐるのによく似てゐる。

この外海の中には、小さな動物や植物があるために紅色、褐色、黄色などを呈することがある、こんな海の水は時と所とに依つて、色を變ずるが別段海の水の色が變るのではない、海の水は透明で無色である。唯其の中に色々の難り物があるとか、其上にある雲が色々な色を呈するとか、何でも變るのは、丁度白紙は其元を尋ねればまづ白であるが、其上に塗るもの、色に依つて如何でも變り、又人の心は始は、清淨潔白で、海水の透明なるが如くに、白紙の純白なるがごとくであるが、種々な人と交際するにつけて種々に變じて悪

人ともなり、善人ともなると同様である。

近頃の暑ごでは、朝夕の海邊散歩は愉快であるが、日中は餘程暑しくて散歩も出来ない。此時こそは、海水浴に適當した時である、砂はやけ、草の葉も亦燃ゆる許りの時に、衣服を木蔭にぬぎ捨て、青々した海へ飛び込めば、これは又別世界である、其愉快は又格段である。はね廻り、飛び泳ぎ、くぐり抜けなど又得がたい樂である、遠く海岸を離れて、群を抜き、獨り碧海の面に浮び、得意然として泳いで居るのも、うらやましい位である。されども、獨り得意顔で、あんまり遠くへ出かけることは、慎まねばならぬ。といふのは、如何に游泳の達者でも、海の底から、足を引張るものがあつて、まことに危険い。それは何かと云ふと、いろ／＼の海藻だとか、くらげなどである。

海に在る海藻の種類は、大變なもので、其大さもいろ／＼ある。小いのは肉眼で見えない位のものがあつて、大きいものになると、何十間といふ長いものがある、この長いのが泳いでいる人の足に、まき付いて、遂には其人を溺れさせることがある。海藻は三十間もあるが、之を陸地にある植物に比べて見ると、大變風白いことが知れる。

海藻は、人間でいへば、丁度骨なし子や、提灯兒を見た様なものである、體に少も骨がない、即かたい確した所がない。夫で波のまに／＼西へも東へも動揺するから、折れる心配は少もいらぬ、もし海藻が陸上の植物の様に、確していたものならば、暴風雨の時などは、ペリ／＼折れてとても安々と生活することができず、常に波のこと許りを心配していなければならぬ。幸なことには、造

物者がそれ／＼甘く適當に造つてくだされたので
海の中の植物も、無事に生長することが得られる

陸上の植物は、

骨なし子ではならぬ。

しつかりして

いなければならぬ

丁度骨なし子が、

立ち得ない様に海

藻を陸地に植えた

らば、大變ですぐ

へコタレて枯れて

しまさるのである。

であるから、陸地

の植物には、組織の内に、こゝかしこに堅い所が

あつて、心棒をなして居るので、少々な風なんか

には、容易にへコタレルことはない。

こんなに水の中に在るのと、陸上にあるのとで

構造が違つてゐる處

が面白い。こんな

異點も植物ばかり

ではない、動物に

迄も見ることが出

来る。海にすんで

居る、いか、たこ

ふか、などはなよ

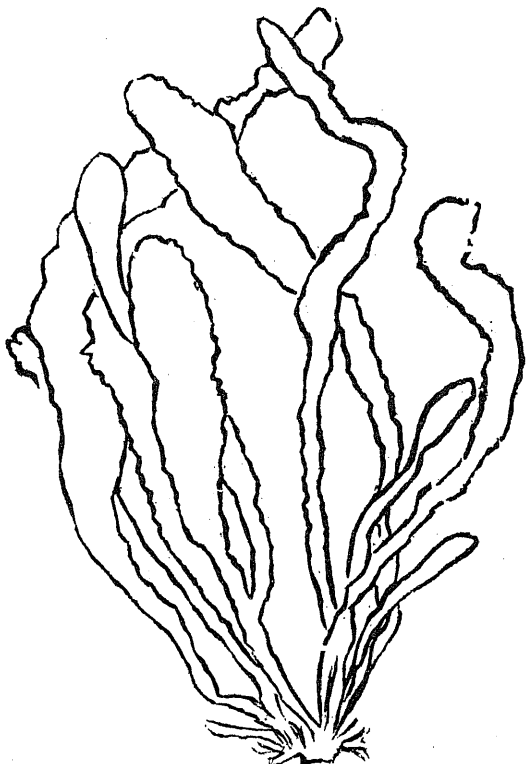
／＼して居るけれ

ども、陸にある猫

や鼠などは、堅い

骨を以て居て確している。

ぐらげの様な少ななものがどうして、人の足を引



海藻の圖

ばるかといふに、くらげは別に引つばる手は持つて居ないが、一種特別な奇妙な仕方て人を困らすことができる。

くらげには、

いろ／＼種類があるの、其形も色々である、

次の圖は、最普通

通のくらげであるが、上の方

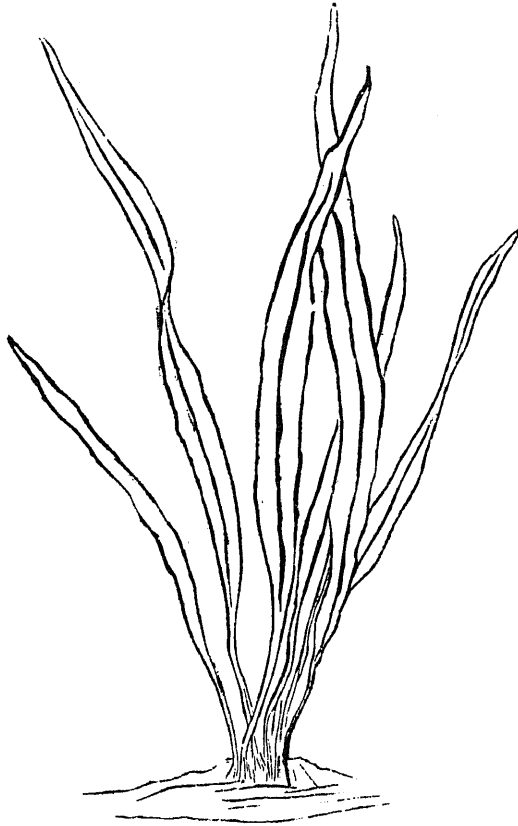
平たいのが身體

で、海に泳いで

るのを見ると、

丁度雨傘の様である、して、其下にあるたこの足

見た様なものが、くらげの足である。この足が大



層こわいもので、人なんかでもこれがために困らせることがある。なぜこんな小さなびら／＼した足

から人の様な大

きなものが困ら

せられるのであ

らうか、一寸考

へて見ると不審

ので堪らない。人

間もこゝに至る

と、餘りえらく

ない様になつて

くる。然し、之は

どうも致しかた

が、造物者のえらい所である、もしくらげ

がない、くらげが夫丈の仕掛けを以て居るのだから、こゝが造物者のえらい所である、もしくらげ

が大きな動物に抵抗することが出来なかつたら、

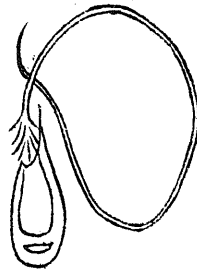


くらげ

いつも、他の魚類などから苛められて、とても此世に生活することは、六かしいかも知れぬ。造物者はそれらを生活せしむるため、いろく々な仕掛で敵をこわがらせる様にしてている。

くらげの足を小さく切つて、顕微鏡といつて、物を百倍にも千倍にも、大きくして見へる器械で

見ると、其小さな足の内に、次の様な小さな袋がある、其袋の一方には、針のような突起ありて、人間だの他の動物が、くらげに觸れると袋の

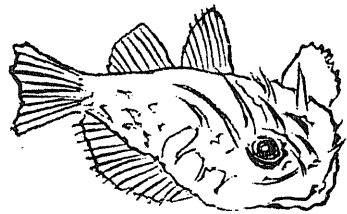


糸 細 胞
の 中 中 中
から から から
長い 液 液
針が 汁が 汁が
でて、 が出て、
それと 同時に袋
にさし入るのである

しくつて痛を感じる。その上、針の根元の所に逆とげがあるので、容易に除かれないから、尚一層長く痛みを感じる。よく海水浴の時に、何だか知らぬが刺されて痛を感じて、苦しいことのあるのは、こんな針を持つてゐるものに刺さるゝからで

ある。人間の様なものにも尙痛を感じることに此の如きであるから、まして小さな動物は中々たまらない、吾々が毒蛇にかまれた様だろうと思ふ。くらげがこんな針を以つて居るのは、敵を防ぐ爲許りでない。自分の餌となる小動物を殺して食べるのに役だつ。それは、どうするかといふと、まづ小さな動物が、くらげの足の近邊へ來ると、例の針で殺して、足をさきり／＼曲げてこれを擒にし、しまつて、すぐ口の中に入れて食べてしまふ。此くのごとく、敵を防ぐと同時に、食物を得るための仕掛は、其他の動物にも、往々見ることが出来る。

おこぜといふ魚を見たことがあるでしょうが、あのおこぜの鱗から、堅い鋭く尖つた針の如き骨がで、居る。おこぜの怒つた時は、この針を振り



廻すので大へんこわい。時とするに此針にさされて死ぬることがあるから舟人は普通の魚類の内では、一番こわがるもので、網にかゝつても大低はあふないから捨て、しまふ。

又めくらうなぎといふ魚がある。これは舟人の最悪むもので、網にかゝつたのは皆すて、仕舞ふ。何故といふに、この魚の體から、ねば／＼するものが澤山で、くるるのであるから、もし籠などに入れたものなら、籠全體がねば／＼して、とても用に立たないようになつてしまふので、誰れもこれを取るものがない。であるから、めくらうなぎの一族は、敵に取られる心配がなくなつて、安心

して繁殖はんしよくすることができさる。

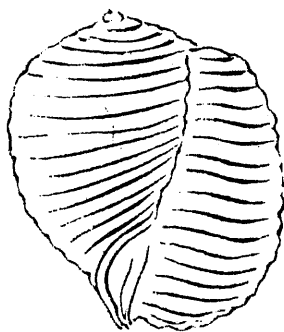
又またあるものは、いやな嗅氣しゆきをもつて居るので、誰たれもこれを取とらないから安心あんしんして居る。

又貝類またいれいや、よろい魚、龜、人手にんてなどの如ごとく、體たいの外部ぐわいぶに堅かたい被かひ物を以もつて居るものは、如何いかに強き敵てきがやつて來きても、堅かたい被かひの中に隠かくれるのだから、平氣へいきの平左衛門へいざゑもんで威張いばつて居ることが出來る。

けれども鴉からすには此貝このがいも困こまつたといふ話はなしがある。

ある時鴉ときからすが空からから、不意ふいかにやつて來て、貝がいを食くほうとすると、貝がいは心得こころえたりと直すぐに首くびを殻からの中に引ひつ込こめました。で、鴉からすは貝がいをおどかしたり、おだてたり、すかしたりして種々いろいろに手てを盡つくくして見みたれども、殻からがかたいのでなんとも仕方しかたがない。で鴉からすはいかにも、殘念だんねんと思おもつて血眼ちまきになつて考かんえたが、何か思おもひついたと見え、不意ふいかに立たち上あり、

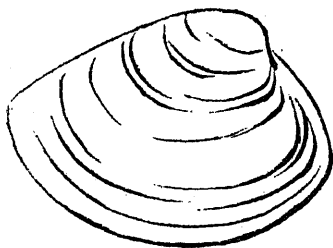
貝がいをくわへて高たかく中天ちてんに昇のぼりたる頃ころ、ビューツと



いガラゴ



いダウコ



はまぐり

貝がいを投なげ落おしたので、貝がいは風かぜを切きつて海岸かいがんの石いしの上うへへ、パチーンと落おちたので、さしもの堅かたい殻からも

粉なみぢんになつて遂に鴉の食物となつたといふ話がある。

何でもこの様に知識といふものが必要である。知識さへあれば、今まで害になつたものでも却つて有益になすことができる。

貝を食べやうと思つて、中の肉を引き出さうと思ふと、貝は縮上んで中々出てこない。けれども一寸考を廻らして鍋にかけて煮ると、苦もなくポロポロと離れてくる。(未完)

川音につれて啼き出す河鹿かな

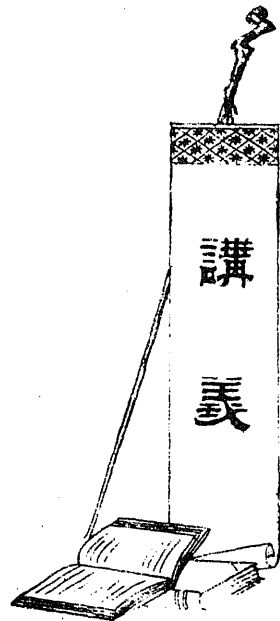


兒童研究法

文學士 松本孝次郎講演

視覺の研究 上 注意すべきこと

之はブライエル氏の觀察の順序に由て申しませう
(イ) 光を感ずること 暗き室内に睡れる小兒は若し燭光が其顔面に近づく時は醒むるか或は醒むることなくして眼瞼を固く閉づるか。幼兒の瞳孔は眼を被ふて光線を遮るものある時は擴大となるか、室内を忽然暗黒にする時は不快の狀を呈するか。或



はかゝる不快の状は適當なる光線を遮ぎりし時に顯はるゝか。若し一眼を手にて覆へば他眼の瞳孔は自ら擴大となるか。光を不意に薄暗き室に持ち來る時は小兒は頭を他方に轉ずるか、かゝる状態にありては小兒は泣くや否や。

如何なる距離にある燭光は快感の状を呈せしむるか、如何なる距離にある輝きたる物體は快感の状を顯はざしむるか。

最初眼は開かるゝよりもむしろ閉づるものなるか

何日頃より開くに至るか。眼は弱き光に於ては多く開かるゝか。屢々一眼は閉ぢ他の一眼は半或は全く閉ぢたることあれど何日頃よりして兩眼を同時に開閉するに至るか。光線明なる處に於て新生兒の眼前に青、黄、綠、赤、黒等の玻璃板を保持する時は顔面の表出に如何なる變化あるか。

(口)色の識別 小兒は何日頃よりして色を識別し得るの形跡ありや。又如何なる色を好むが如く見ぬか。

小兒若し自ら手を延して物を握り得る頃に至りて種々の色を其前に置けば如何なる色を取らんとするか。なほ此際左右いづれの手を用ゐるかを注意すると左きゝ右きゝの參考になりませす。

若し小兒が稍言語を解し得るか、又は知覺が明瞭になるに至らば種々のおもなる色を二様づゝととりそろへおき、或一色を示して之と同色の物を選び出さしめ其答の正しき場合と然らざる場合とを分るがよろしい。又稍成長したる後には色に關する語は如何に多くを知れるかを檢するがよろしい。

(ハ)方向に就きて 何日頃より燭光の方を見つむるか。何日頃より上下及左右に運動する燭光を追視

するか（この實驗は出生後第二日よりはじめて二三日毎にするがよろし、通常は第二十日後に於てかやうの作用はじまるとフライエル氏は言はれました）眼の運動と共に頭を運動するに至るは何日頃よりはじまるか。

始に物體を凝視する時に兩眼は共に動くか。將た然らざるか。眼は永く動くことなくして物體を凝視するか。

(二) 遠近の物體を見ることにつきて、輝きたる小さな物體を眼に近く保つときに瞳孔の收縮するを見るを得たならば、それは小兒が近き物體を凝視するものであることを知るに足る。即ちこゝに近き物體に對して兩眼の協同作用あることを證する。

通常小兒は最初母の顔面を凝視するものであるが、かゝる作用は何時頃よりはじまるか。遠き物體を

凝視するは何時頃よりはじまるか、又如何なる距離の物を凝視するか。

初小兒は手を突然彼の顔の方に出すも瞬きすることなし。而して其瞬するは何時頃よりはじまるか。又突然手を小兒の顔の方に出す時に於て瞬するは何時頃よりはじまるか。

以上は家庭日誌をつけるに付て注意すべきことであり、ますが幼稚園や小學校で注意すべきことを之から申しませう。

(イ) 眼瞼殊に下眼瞼を動かすことを司る筋肉即ち眼輪匠筋のはたらき方を注意することが必要であります。之は笑ふ時に下眼瞼の處に皺のよる筋であります。が幼稚園や小學校の兒童の中には此筋の作用が弱くなり張力なくゆるみて下眼瞼の處がふくれて袋の様になつて居る者があります。膨脹は

腦の作用の弱さを示し又一時かゝる状態ならば其
 兒は非常に衰弱して居るか疲労して居るかを示し
 ます。そうしてかやうな兒は屢々頭痛を訴へるも
 のであります。注意しなければなりません。

(ロ)又兒童の二歩ばかり前で鉛筆の様なものを動か
 して見せる時に眼を動かさないうで頭全體を動か
 して見る兒があります。之は喜ぶべき現象ではあり
 ません。此事は精神が虚弱であるか。衰弱して居
 るか疲労して居るかを現はすのであります。

(ハ)又眼の運動の非常にはげしい兒童があります。
 之は丁度身體がふるへるやうに目がふるへながら
 運動するのであります。指頭に起る自發的痙攣と
 よく似て居ります。神経質の兒の手が屢ふるへる
 やうに神経質の兒の眼は運動のはげしいものであ
 ります。

史傳



野村望東尼 (つづき)

下村三四吉

これよりさき、長藩が幕府の征討軍に對し、罪
 を謝して恭順の意を表せんとするや。同藩士高
 杉晋作等の壯士は、これに反對して、宜しく幕軍
 と抗戦すべしと唱へき。然るに。恭順黨の論は
 遂に勝を制し、蛤門の變に與かりし三家老を死
 刑に處して、伏罪の實を表せしため、交戦を見る
 に及ばずして事止みけること、前は略述せるが
 如し。晋作、憤慨に堪へずといへども、頽勢支ふ
 るに由なく、しばらく機を待たんために、望東尼

の郷里なる福岡に奔りて、月形洗藏に依りぬ。時に元治元年の十一月なり。洗藏は福岡の尊王黨の志士にして、長州征伐の際、三條實美公以下五卿を、薩筑、兩肥及び久留米の五藩に分囚せんとの議ありけるを、薩藩の西郷隆盛等と謀りて、その間に周旋し、遂に共に太宰府に移轉せらるるととなしたるも、この人の力によれる者多しといふ。かくて、高杉晋作の來投を受けたる洗藏は、同志と相謀り、望東尼に請うて、その平尾山なる別荘に世の耳目を忍ばしめぬ。望東尼晋作の志を憐み、快よくこれを承諾し、懇に待遇しけり。この時の事なりと聞く。望東の女弟子に吉村すがとて十四五歳ばかりの少女ありしが、晋作、ある日、これに向ひ、和女も大和魂といふことを知りてやと問ひしに少女とりあえず「われも同じ人

の形にひまれきて大和心をしらざらめやは」と答へければ、晋作ふかく感賞して措かざりきとぞ。望東尼が感化のほど想ふべきにあらざるや。

晋作は望東尼の別荘に潜みしこと凡そ二十日。この間、郷藩の情況は福岡の志士によりて頻々として傳へられしかば、一日も速かに歸國して義兵を擧げんとて、老尼の日來の厚誼を謝し、首途に就かんとなす尼は、もとよりこの事のあるべきを知りたれば、かねて晋作のために新に調へ置ける袴、羽織、襦袢を贈りて贈とし、且つ「情からぬ命ながかれ、櫻花、雲井にさかむ春をまつべき」との一首の歌さへ添へたり。晋作も、また一詩を賦して、これに答へ、あつきこゝろのこもれる新衣を着けて、出で立ちぬ。

前にもいへる如く、三條公以下の五卿が鏡前に

遷させられしは、慶應元年の正月なれば、晋作の歸國の折は、なほ長藩に居られしなり。晋作は、下關にて五卿に謁し、不日義兵を擧げて俗輩を討滅し、形勢を回復せしめんことを誓ひき。

已にして、征長總督は、事定まりしを以て、兵を解きて東に歸れり。下關に潜伏して時を待ちける晋作は、機至れりしとなし、即夜、かねて養成せる奇兵隊を率ゐて、恭順黨を破り、當路の重臣數人を殺して、全く藩論を一變せしめ、藩主毛利慶親父子を擁して山口に據りぬ、こゝに於いて、長州再征の議起り、五月十六日將軍家茂は江戸を發し、先づ京都に着し、尋ぎて大阪に入り、諸藩に令し、兵を長防の四境に進めて、海陸並び攻めしめき、この征討の軍は、しばしば敗れて功なく、遂に八月家茂薨去を期として師を收めしこと等

は、こゝに細説するの違なし。更に、望東尼の身上に立ち返りて述べん。

福岡藩にては、かねて、藩論は、正義派と俗論派との二つに分れ居り、先には、月形洗藏、早川養敬等の尊王黨（即ち正義派）藩論を制して俗論黨を退けしに、長州再征の議起るに及び、俗論黨はこれに乗じて、再び勢力を回復せんことを務め、種々の手段を以つて、正義の一派を讒構排斥せり。かくて、奇禍は忽ち尊王黨に及び、月形洗藏をはじめとして加藤司馬、建野健彦、筑紫衛等の人々はいづれも職をうばひて獄に下され、望東尼もまた、その孫助作と共に幽閉せられき。

實に慶應元年六月廿六日なり。（つづく）

浮雲のつかるもよしや武夫の

やまと心のなかに入りなば（望東尼）

文苑



静

高安 月郊

君と芳野に別れしは
 雪の花ちる冬の暮
 今は櫻の雪香ふ
 風は我身の春ならず
 君はいづくにおはすらん
 雁も通ふかみちのくの
 空にかいやく朝日かけ
 あはれ一雨降れかし
 雨は我身のなかだちや
 神泉苑にまみえしも
 堀川御所にはべりしも
 雨はなさけを添へけるに



露も散らして鶴か岡
 戀もなげきも白拍子
 誰に示さん一さしを
 神をかことに舞へとは
 幕を伺ふ鎌倉の
 殿は我身の仇ぞかし
 打てや鼓もつはものゝ
 はやしにさらば舞ふべし
 廊に溢るゝ阪東の
 武者は雲とも寄りて見よ
 かざす扇はたをやめの
 静が胸のつるぎぞや

弓矢の神も見そなはせ

判官殿も聞こしめせ

君のかたきを今こそと

思ひのまゝに歌はん

しづやしづ賤の小手巻くりかへし

昔を今になすよしもかな

貧女嘆

東くめ子

軒端の松に風絶えて

日影に騒く晝の塵

泣なみむつかりし兒は寝たり いさ此暇に急かなん

あはれ世にある人々は 青葉涼しき山々に

白波よする浦々に 己がむきく遊ふてふ

此うす絹のなつ衣、 我物ならば嬉しきを

流るゝ汗に汚さじと 心して縫ふ苦しさよ

貴女怨

同人

夕顔棚の下涼

おのが儘なる樂は

賤か伏家にありとかや世をしら玉の小簾の中

身にはうすもの纏へとも 手には扇を離さねど

熱き涙のこぼるゝは 冷き人を怨むなり

庭には清水流れつゝ 涼しき風は通へども

胸の思はたきものゝ かやりと燃ゆる夏の暮

夏夜 平もと子

故郷に通ふ夢路の浮橋を

渡りあへぬに明くる短夜

朝顔 東くめ子

日の影にあてじと覆ふ袖垣の

ひまよりにほふ花の朝顔

水郷 須川ゆき子

夕風に岸邊の柳うちなびく

影もすゝしき川つらの里

深夜 螢

鈴木金太郎

涼とる人影絶えぬ月も落ちぬ

柳がぐれに螢三つ四つ

長野盲人學校生徒の俳句第一回の吟

長野 飯島八千溪

秋

美しき庭の亂れや秋の風

酒井

大木の吹き倒されし野分哉

同

故郷を物思ふ夜や雁の聲

同

髪の毛のもつれを吹くや秋の風

同

此松に又來てとまれ秋の蟬

宮島

谷あひや紅葉の中を秋の水

同

朝夕は神纏ほしき秋の風

同

そよくと芒にさはる秋の風

同

しんかんと獨の我に秋の蟬

宮嶋

女郎花戀に咲くべき名なりけり

駒村



説林

母と教育

齋藤鹿三郎

昔者、人あり始めて愛子をあぐるや、如何にしてその子を教育すべきかを知らんが爲めに、幾多の教育書を繙きたるが、讀破數卷にして「我はさとれり、我は猶善くならざるべからず」と獨り言をいふた。

これは、蓋し、その慈愛深き我が子をして、善

良有用なる人物と爲さんには、己れ先づ善良有用

の人物となりて、これを指導するにあらざるより

は、到底、その子の完美なる教育を爲し得べからざるものなりとの理由に、深く感激したのである。

殊に、家庭の教育にありては、児童は主として

父母の性格の感化によるものにして、世の諺に

親の行は總てその子に映るといへるは、實にこ

の間の消息を穿ち得たる言である、これにつけて

も児童を育てる上に就ては、世の親たるものは、

餘程精細なる注意をはらはなければならぬと思ふ

佛國の教育家コンドルシー氏は、人の母たるも

のは、その子の自然的教育者なりと、いはれたる

が實に児童の教育に對して、婦人は最も親密にし

て、且つ最も重要なる地位にあるものであるとい

はなければならぬ。

さればこの母ありて、この子ありとは世人の常

によく口にする所なるが、實にその母たる人の品

格が氣高くして、徳操も堅く學識も亦深きに至り

ては、その感化著しく、児童の心に浸みわたり

て、能く偉大なる人物をその膝下に出すといふと

は、古今決して珍しからざることである。

これを以て世の母たる人にして、深くこの點に

感發し、子女教育の爲めに、苦心慘愴して、我が

身の修養を務めその子故に迷ふ親心は人の得てた

やすく察すべからざる程である、されば孟母斷機

の類はいはずとも日常卑近の細行にいたるまで、

心ある母親の心づくしはまた一通りならぬもので

ある。

嘗て雷鳴をいたく恐れし婦人が、かゝる怯懦の

性癖ありては、我が子の氣力など鍛へらるべくも
 わらずとて、これを矯正せんが爲めに雷鳴の日、
 殊更庭前に端坐したといふ美談もある。また己れ
 徒に逸樂に耽りて、唯その子の勤學を責むるは、
 甚だ非教育的の仕打なりとて、富貴顯榮の身に處
 しながら、自ら一業をとりて、夙に起き、夜はに
 いねて、その子の鑑戒に供し、さては兒童の教育
 に就いては、通常の準備より辨當の用意にいたる
 まで、一切婢僕などの手に委ねずして、自らその
 勞に當りて樂みし母親もある。

世界の英傑といはれたるナポレオンが嘗て、一
 國兵士の強弱を知らんと欲せば、須らく、その
 國婦人の健否を見るべしといはれたが、殊に子女
 の教育の結果に對しては、母の賢否如何に歸する
 ことは、猶一層鮮明なる分界を示すものであると

思ふ。

されば吾人は、婦人を以て人類世界の花である
 と思ふのである。そうして將來如何なる果實が、
 この花によりて結ばるゝかも亦豫めトせらるゝ
 ものであると思ふ。これを思へば世の婦人は、そ
 の子女教育の重任に對して、最も慎重の態度をと
 り奮勵せられなければならぬと信ずるのである。
 何となれば、婦人の胎内より生れ出て、只管婦人
 の手によりて、教養せらるゝ兒童は實に婦人によ
 りて、結ばるゝ果實にして、しかもこれ等の兒童
 が將來世に立つに及んではその人となりの、如何
 に關係し小にしては一身一家の幸不幸、大にして
 は國家興廢の依て岐るゝところなるからである。
 これを思へば天然の教育たる重任を負へる人の
 母たるものは自ら奮ふて我が身の修養研鑽に意を

用ひて明確なる知見、圓滿なる感情、堅固なる意思を有して將來の國家を組織する兒童の爲めに確信あり、熱誠なる所の教育を施さんことは、吾人の實に切望に堪へざるところである。

寄書



愉快なる家庭

東京 秋影 生

家庭の愉快は何邊より來るかと題して、神門女史の擧げられたる三要素も然るとながら余は更に(一)家族の趣味好尚の一致(二)餘裕ある生活の二要素を認めむと欲す。(三)今夫れ良人は園藝を好みて音樂の趣味を解せず、妻は音樂を喜びて園藝

に興趣を牽かず、彼の樂しむ所は此の苦しむ所に此の喜ぶ所は彼の厭ふ所畢竟趣味好尚の一致を缺く時は感情の裕和をみると能はず、往々にして衝突を來すに至る、それ感情の衝突ほど不愉快を醸すものはなく家庭の平和屢之がために破る。而してこれもと些々たる趣味の相異よりして來ると多き也。若し一人の樂しむ所は即ち一家の樂しむ所、舉族怡和して藹々たるを得ば、家庭は長しへに愉快ならむ。(二)かの山に登るもの、峻峻を攀ぢ、荆棘を開き、喘々焉として疲倦困倒せむとす、偶々夷に就て憩ひ、眺瞰を試むれば、眼界遠く開けて田疇居落相連る所、炊煙縷の如く揚り、一川浴々銀蛇を其間に走らし、時に白帆點々上下するを見る、是に於て心神頓に濶然、脚力新に加はり疲倦を忘れて頂を極むるを得べし。生活に餘裕を

要する、亦なほ此の如きか、蓋し人、業に専られば從て其業に興味を生ずるに至ると雖も、一年三百六十餘日、朝々暮々同一の日課をくりかへして、又他を顧るとなくんば、能く疲倦を來すとなからむや、此間一日の業を廢して遊戯に充て以て氣力の恢復を圖らば、疲倦を醫して愉快に再び業に勵むを得む、殊に多數の男女を雇使する家に於ては最もその必要をみる、遊戯は擧族共に樂しむを得るものなるべく、春は東風吹く野への蕨探り、秋は紅葉濃き山路の首狩など、興趣と健康とを併せ得て、一家の和樂に資すると大ならずむばわらず。かの西洋の人は、安息日の至るや擧家行厨をたづさへて山隈水涯に遊び愉快に一日を暮らすを常とすといふ、わが邦人の生活に餘裕なきは誠に恨事にあらずや。その家庭の無趣味にして快

潤を缺くも畢竟之れがためのみ。

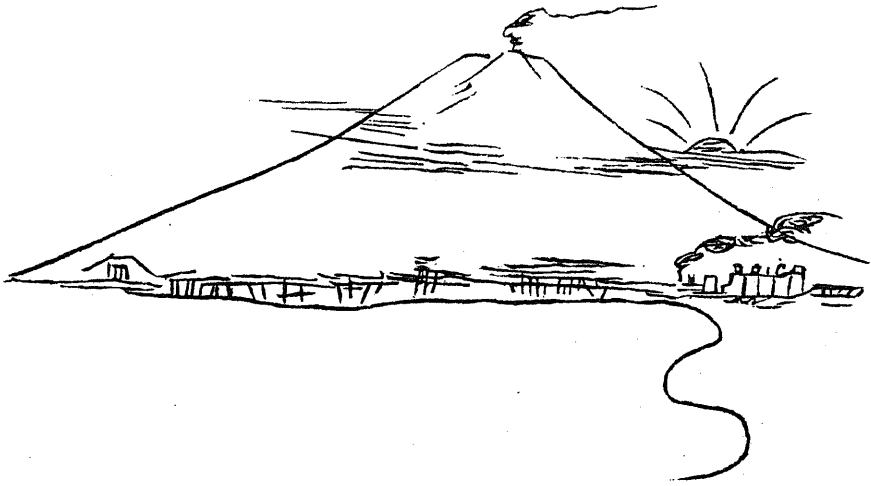
以上神門女史の説をよみて感ずる所を記す、説いて盡さざるところあり、他日を期せむ。

余が實驗せる特殊なる家庭と

その兒童

岩手縣師 菅原 文一郎
範學校

私はかく大氣さにいるのは、實は本意ではありませぬが、只私が地方にありて、一寸餓鬼大將をやつたときに、或る一人の生徒について、大に感ずる所があつたので、之れは自分ながら、小供を育てる上について、大に氣をつけなければならぬ所だと思ひましたで、遂筆の拙いのも顧みず、感じたを述べようとする次第でございます。



五年十ヶ月
の男子本誌
登載の子供
の繪を見之
を批評して
自ら描ける
ものなりと
福島縣の讀
者より寄せ
らる

さてその兒童は、私の居つた時は、四年級の生徒で最も優等ではございしましたが、惜しいことには、體の弱いことであります、顔色なども青ざめてやせ細り不活潑でありました、地方などでは、却てかういふ柔弱なおとなしいというてほめて居りますが、之れは一つの通弊だと思ひます、私はどーもこの生徒は、不活潑でならないから、少し活氣をつけてやらうと思つて、始終その方に向けてよーとしました、中々思ひ通りには、いきませんでした、まづ學校に居て今歸らうとする時などに、俄か雨がふりましても、他の生徒などは、少しも氣にかける風が見えず、下駄をぬぎ、裾をまくりて駆け出し、中には今に迎へにくるのが知れて居りながら、わざと駆け出すというよーなものもありました、この生徒にかぎつては、ちつと

もそーいうことはありませぬ、夫れで時にはわざとすゝめたこともありましたが、今に晴れるとか迎へに来るとかいうて、少しも勇けというよーなことはないのです、勿論體操の時間などにも、少し荒い事をやると、泣き出すというよーな鹽梅ですから、どーも困つたのです、して「私は、折を見ては活潑に活潑にというものだから、小供心にも、叱られると思つたでしよーか、だんくには私をいやに感ずるといふよーな模様も見えたのです、夫れでどーしたらよからうかと、始終考へましたが、先づ第一家庭ではどーいう風に育て、居るだらうか、之をさがすのは、教育する上から肝要であると思ひまして、今度は遊びの時とか、或は、放課後遊びに来た時などに家庭の事状などをきいたのです、初めは中々耻かしがりてはなさな

かつたでしたが、だんく、少しづゝはなさせたのであります、先づうちの人などをきいたら。

おぢーさんにおばーさん、お父さんにお母さん夫れから、一人の兄さんと、二人の弟と今では八人ですが、元とは二人の姉さんまで、十人ありました、二人の姉さんたちは、他所に嫁れて居ないけれども、お正月や、盆などには來ますなどをはじめとして、夫れから、おぢーさんが

父母之年不可不知……というて、家の人の年を知らないのは、不孝の一つであるから、よく忘れないうよーにと、教へてくれたとて、一々年などまで語りました、夫れから、誰れと寝るかと問うたら一番小さい弟はお母さんと、それから中の弟はおばーさんと、そして私はおぢーさんと寝ると、まがほになつてはなしました、夫れから、いろいろ

ろな間をしました所が、おぢーさんは、未だ夜の明けないうちから、目をさまして、書物を教へたり、昔話しをきかせたりするものだから、弟たちも這入りたがつて起きて来るなど、ありわり目に見ゆるよーにはなしました、そしてこの生徒はおぢいさんに教はつたというて

大學朱熹章句 子程朱曰大學者孔子之遺書而

初學入徳之門……とか或は

關々唯鳩在河之洲窈窕淑女君子……と

か

先づ大低の書物を誦誦しました、勿論意味などは分らなかつたけれども、何しろ家庭のちがうということだけはわかりました、

尚ほ昔はなしなどについても、道真とか正行と

か、牛若丸とか日吉丸とかについて、まるで小供

のはなしの様でもなく、眞に同情を表して熱心に語るには、實に一驚を喫せざるを得なかつたのであります。

とにかくこの兒童は、朝夕、おぢーさんに育てられる様子であるから、委しくおぢーさんの事をきいたのです

さてこの生徒のおぢーさんは、舊幕時代には、膽煎とか檢斷とかを務めた人とかで、村での學者だそうです、教鞭こそ手にとらないが、中々小兒教育は熱心にやつて居るそーだ、かゝる人は中々世にも稀れであらうと思ひます、そしてこの老人は、中々果樹栽培に熱心であるそーだが、全體この地方では、梅とか桃とか栗とか林檎とかすべてなりものについては小供ばかりでなく、大人までも他のものを盗むというよーな、弊風があつたの

で、之れは小供らの罪ばかりでなく、全く両親が
 わるいのである、自分の家にないから、自然かう
 なるのだ、かういう心が増長しては恐るべきもの
 であるということ、痛く心配して、あらゆる果
 樹をうゑて、決して盗むというやうな心を小供ら
 に起させぬやうにと、人にも聞かせ、小供らにも
 平生言ひ含めて居るそゝだが、中々言うて見れば
 雑作もないことであるが、かゝる人は、わりがた
 い事と思はれる、かゝる教への庭に育つた子供ら
 の立派なこと、言はずも明かなことでありましま
 一併しをしい事には、昔人だけで、體育にはあま
 り、感服しない事もある、又この兒童の薄弱なの
 も、この祖父の缺點でありはせぬかと、疑はれる
 のである。

(未完)

子 供 心

長野 飯島八千溪

▲或所に、六七歳になる、女の子が有りました。
 或日、お隣へ遊びに行きましたに、其時丁度、お
 隣の叔母さんが、着物の蚤を捕つて、火鉢にくべ
 て居ました。そゝすると、其女の子が「アレこゝ
 の叔母さんわ、蚤を焼いてたべるの、私のとこの
 おつかさんわ、生でたべますよ」と話しました。
 ▲又或所に、貧乏で、三度の食事も、甚だ、粗末
 で、寝るに布圍もなく、僅に、藁屑の中に寝ると
 云ふ、憐な暮しをして居る、家が有りました、或
 時、父が其子に「お前わ、決して、人に藁屑の中
 に寝るなど、云つてわ、なりませぬぞ」と、云ひ
 聞かせました。すると、或日の事、父が藁細工を
 して居る所へ、人が来て、話しをして居る、其時

父の頭に、藁屑が、付いて居るのを、其子が見つけ、あわて、うアレ父様の頭に、お布圍が取付て居るよ」と云ひました。

信州松代の手毬歌

石坂よし

▲一や二ーみいやよー。よめよめ吉田の千本柳に雀が三疋とーまつて、一羽の雀は嫁入なさる、二羽の雀はひこ入なさる、三羽の雀は、酒買に行くとして、鷹におはれて、あれやポン〜これやポン〜。ぢ、ば、一寸来て一寸かくせ、まづ〜一買貸し申した。

▲ざん〜ざん〜〜くだ〜梅の花、こゝでお一つお手ばたき。

▲お輕は二階でのべ鏡椽の下では小野九太夫、主

人の退夜にたごさかな。おさかなとる猫どろぼう猫、やつと山猫さんしよ猫、やわとせやつとさのせ。



八月の天地

摩訶生

午後二時前後、寒暖計は常に九十三四度を昇降す、涼い哉…心の置き方によりては。氷を飲みて暑を凌ぐ國民は懦弱の國民に非ずば野蠻人の仲間なり。寧ろ鐵瓶の蒸氣のシユン〜たる傍、白湯一杯を傾けむものに與せん哉、心氣爽然として、

さながら白熊の棲へる北氷洋の氷山上に遊ぶ心地やせむ。

炎威赫々たり、盛なる哉彼の蟬や、椎の大木にすがりて聲張り上げて歌ふなり、中には經文を讀むが如く念佛を唱ふるが如き悟入せるものあり。

水田の間、鮎の兒供の尋常三年生一隊は列をなして清流の溝を進み、清流の邊、翡翠は、杭に止つて頻に水中を窺ふ。

夏の空、際涯なき蒼海の如く澄み渡りて藍よりも青し。此蒼

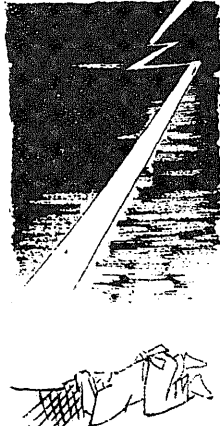
空の一端にフ

リくと眞綿

の如く雪の如

き夏雲は起る

その沸き出で、峭しき嶽となり、凄まじき谿とな



り、涼しき濱となり、勇ましき磯となりて、押し寄せ來る千變萬化、愈出で、趣愈深し。

ともすれば其谷間より僅に現れし薄墨色の雲、頓て火口の如き黒雲となり、忽ち起る一陣の驟雨に、我劣らじと霹靂一聲、天柱挫け地軸も折れよと鳴りはためきたる性急の雷に、平生の自稱豪傑が荒膽潰されて慌てふためき蚊帳の中に、頭かくして尻残したる最もをかし。

驟雨收まり雷去りて、夕陽の光は森を射て、霑へる綠葉に輝きうるはしき七色の虹を東の空に現しつゝやがて静かに五色の雲の中に没す。

軒の葱草に風鈴に、松風の音涼しく、蝙蝠出て得意氣に翔る。

廿日は陰曆七月七日、七夕に星の祭をなす、仰げば廣し大空や、偉人の胸の中の如し。

夜の火、殊に面白し、岐阜提灯の光、蚊遣り火
 鶯飼舟の篝、飛んで火に入る夏の蟲なかくに憐
 なり。

曉の空、星のまばらなるに池の蓮は濁に染まず
 軽くも笑ふ聲すなり、見よサワ〜と運動かす水
 龜を、慙しげにヨチ〜と半は泳ぎ半は歩み逃げ
 行く後姿は可笑けれど、エライものなり朝寢坊
 に非ず。

露のひぬ間の朝顔はなよやかに愛すべく、晝顔
 の小さくて元氣なる、夕顔の白くわやしげなる、
 鳳仙花の何だかボンヤリしたる、秋海棠の可愛
 げに、馬棘の紫の花の小じまりなる、彙毬栗頭
 の千日紅の健かなる、百日紅の唇動き、夾竹桃の
 何となく元祿時代の美人の儂ある、李の實の白天
 に照されて丸顔を眞赤にしたるは最も氣の毒なり

笠わらば貸さんといひたさまでに。

顔黒けれど心の紅き西瓜は村外れの畑に座して
 劉備の三顧を待つ如く。柚木の住むてふ山奥の低
 き茅屋根に這ひ上りたる蔓の中程に頑然と尻を据
 たる南瓜の、何を意張るにや癩くれだちたるいと
 をかし。絲瓜の宙にぶらりと平氣なる、されど筋
 骨の役に立つべきところは瓜類の柳下惠ともいふ
 べきか、白瓜、菜瓜、越瓜、甜瓜、亞弗利加土人
 の親類内なる長茄子圓茄子皆熟す。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の色にぞ
 驚かれ、夜はふけて、おはれに蟲の泣く聲きこえ
 始め二百二十日は近きぬ、雄々しき疾風は將さに
 起らむとす。

豊艶ほうたんにして、富貴ふうきの花はなと稱しょうせられ、初夏しよがの庭園ていゐんに風情ふうせいを添そふる牡丹ぼたんにつきて。

てふてふの夫婦ふうふねあまる牡丹ぼたんかな

と、蝴蝶ことうを添そへて形容けいようしたる手際てぎわ、韻致いんち生動せいどうの趣おもむき

ありとやいはまし。

竹の子たけのこやその日ひのうちうちにひとり立た

姫百合ひめゆりや姿見すがたみをする子供こどもから

土見つちみれば限かぎなしとや百合ゆりの花はな

いづれも、おもしろがらぬはなし。殊ことに、最後さいごの

句く、百合ゆりの花はなの下向したむけるを見出みだし、無心むしんを化くわして

有情うじやうとなし、教訓きょうくんの意いさへ寓くうしたるは、諷誦ふうじゆ幾いく

回くわいして厭あかず。

花はなと針はりの心問こころをたづひたさいばらかな

の如ごときは、何なんぞ其そのの觀察くわんさつの奇警きけいにして、雋永しゆんゑいの味あじ

に富とめるや。

朝顔あさぎほにつるべとられてもらひ水みづ

は、最ももつと人口じんこうに膾炙くわいじせるもの。早曉そうぎやう起き來きたれば、

殘月ざんげつ夢ゆめの如ごとく、涼氣りやうき肌はだにかなふ。朝あまみづ

井端いまたに立ち寄よれば、夜よの間にのびし朝顔あさぎほの蔓つるは、

つるべにまといのぼり、星ほしとも見ゆる花はなしほらし

くも咲さき出でてたり、さすがに、心こころなくとりはなさ

んには忍しのびかね、もらひ水みづしてすませたる、溫藉おんせき

優雅ゆうがの氣象きしやう言外げんがいに溢あふれ、餘情じよじやう派々ぱぱたるを覺おぼふ。

千代ちよが幼時まうじの作さくに、

いふまいとおもへど今日けふの暑あつかな

の句くあり、他奇たきなき常事じやうじなれど、人ひとの言いはんと欲ほつ

して、未いまだ言いはざるもの。されど、

動うごかして見みれど竹たけにもあつさかな

晚鐘ゑんしゆに散ちり残りのこりたるあつさかな

あつき日ひや指さもさ、れぬ紅鳥べにとり

の數句は、更に一段の趣致あり。

涼さや氷室の雫くより

松風もおのがものにして蟬の聲

涼さやあるほど出して驚の首

誦し來れば、炎熱の境にありても清涼の氣頓に人を襲ふ。

紅さいた口もわするる清水かな

に至つては、いはゆる一句人を涼殺するのみならず、女性の細心溫雅自らわらはれて、到底男子の想ひ到らざる所なり。余は、最も此の句を愛す。

なほ擧ぐべきもの多かれど、俳句の短かさに困みて、ここに止めつ。

(完)

とんぼつり今日ほどこまで行つたやら (千代尼)

女監を見る

溼 生

工場を出づれば軒下に立ちて大釜にて糊炊く者二人地に伏して禮す、毎日斯く炊かざれば供給にこと缺くよし例の人いふ、此處を過ぐれば則ち洗濯場なり。此處にも亦た十五六人、一人の看守の指圖にて例の禮終りてうつむきて大の盥を擁くが如くに蹲りて襪せにあせにし例の衣を洗ふさま、われは再び視るに忍びず、一瞥して過ぎ、轉じて物置監に赴く。

房の東に孤立せる一小暗室あり、唯見る、光の通ずべきところは辛うじて隻手を容るゝばかりの小孔のみなるを、謂ふ此室は特にねぢけにたゞのわざにては實を語らず命に従はぬ者はいましめ置

きて反省せしむる爲に設けたる其名も「獨謹室」と

いふと、所謂小孔は内なる囚徒に食を給する差入口にして之を閉づれば全く暗黒の室となるなり。

拘置監房に至る、年若き女の竊盜故買の嫌疑にて丈長き黒髪ふり亂して俯伏して泣き居たるあり、そも此處に泣き悔まぬ先きに己が爲さむとする事の正邪のけじめはつかざりしか、聞けば此女の父も母も兄も姉も皆此獄内の厄介者となり居ると、さてもむつかしきは盗みといふ遺傳性の病なり、あはれ此病を根治する術なきものによ、未決囚は此日この一人のみ。

右の房より續きて第二第三第四と順次に皆一房に一人宛静座せり、看守長徐ろに語りける「此處は満期出獄前の囚徒を一週間單獨に拘置して以て他囚と隔離する處なり」と、他囚の傳言をなし若

くは萬一内外の連絡をつけぬにもあらじとの懸念より斯くはするらし、第五第六第七と過ぎ行かむとするに白衣着て袈裟かけたる教誨師の窓近く寄りて何事をか懇に内なる者に説き聞かするあり、視れば内には三十あまりの女の乳呑兒を抱きて泣きつゝあるなり、一行約したるが如く足を止めて眼をむけたるまゝ、耳をばだてたるもことわりなり、われは「この阿魔女愚の智慧が今やうゝまはり來りしか」と獨り歩を轉せしかども何となく寒き心地せしに、更に驚けり、第九の房にて復又生れて一ケ年半ばかりなるが親なる者の膝を離れて鐵の格子にすがり居たるには、彼兒は實に此獄内にうぶ聲あけて今日に至るまで外界のものとして唯鐵窓の外僅に方二三間の内に現るゝ時々いとしめの爲に來る看守の影と教誨師の顔とを見るの



みなりといふ、され
ば我等の過ぐるを見
て人珍しげに無邪氣
にうち笑み居たるな
り、此處に至りて強
情なるわれすら久し
く視ることを得ざり
き、ほだしなきわれ

だに斯くあるものを、現に己が婉ちし罪なき此可
憐兒をして斯かる憂き目をうれしげに過さしめわ
る此親の無慈悲極まる畜生なるよ
これにて女監の全體を略ぼ參觀し終る。
監内は満目總て之を慘愴悽愴の光景のみ、觀來
りて唯思ふ、彼等は如何でか終生世の常の人たる
を得べきと、げに彼等は社會の厄介者なり、番に

厄介者たるのみならず、誠に社會の蠹賊なり、見
よ、見よ彼等の今日ある以前を。

彼等の中には自ら勞せずして竊に他人の辛苦艱
難して積みし財寶を盗みし者あり、正しき商賈の
薄利なるによりて贓品の賣買をなして榮耀を貪り
し者あり、慾を恣にしたる果は墮胎をなしたる
者あり又なさしめたる者あり、嫉妬其他の原因に
よりて刃を以て人を傷けし者あり甚だしきは放火
したる者あり、暮の鴉の時々に急ぐ頃、病めたる母
の藥を醫家より携へ歸る可憐の少女の袷を剝ぎ取
りし者あるに非ずや、殊に甚だしきは深更夢穩
なる良民の枕を蹴つて之が財寶を強奪し果ては之
を一揮の刃にかけひとしたる夜叉あるに非ずや、
陽はに好意を表して食を其姑にすゝめて毒殺を謀
りし青鬼あるに非ずや、つのにつのにつたりたる邪慳

の絆を以て、飢ゑてこゝえて告ぐるに人なく唯亡
 き母の位牌にぬかづきて泣き沈める先妻の子を絞
 め殺したる餓鬼あるに非ずや。

之を思ひ彼を思へば、われは彼等の肉を多くり
 骨を碎き肝を裂き腸を蹂じるとも尙ほ且つ慊
 ざる感あるなり。

さるに彼等が現に恙なく生存へ居るを得るは、
 何ぞ報施の倒なる、天は果して何の必要ありてし
 かく彼等と遇するの寛大なる。

禁ずべからざる此憤慨の中に忽焉として溢れ來
 りしは、何ぞ圖らむ、我涙ならむとは。されど我
 意志は笑ひて長堤を築きて之を堰き止めぬ。

此時、われは既に内より第四第三の門を外に出
 でて、もとの高柵の外なる獄内の通路に立てり。

(未完)

松嶋案内

香園女史

名勝の地は澤山ありますけれども、四季の眺絶
 えませんのは松島に及ぶものはありますまい、雨
 の日も、晴の日も。霞の朝も、月の夜も、何時も
 眺がよいものですから、名工も其眞の景色を畫く
 ことが出来ないといふて筆を擲たとかいふ話も
 あります。

松島は仙臺を距ること七里、東京よりは百里餘
 です、併百里と申しても、瀛車で參れば十三時間
 餘にて行きつきます、朝の五時に上野を出ますと
 其日の午後五時三十分には仙臺につきますここに
 乗り換えまして午後六時十分發の瀛車にて鹽釜へ
 まゐりまして此所にて一泊し翌朝船にて松島へ參

るのです。

鹽釜には有名なる鹽釜神社があります、祭神は

岐神即鹽土翁と申しまして、始めて鹽を煮ること
を教しへたと申す方です、神籠は今に残りて居り

まして御竈社と申し祭りてあります、又安産の神
と申して遠國から參る人が澤山あります。鹽釜よ

り松島までは海上三里、いふにいはいはれぬよき景色
で其間に見ゆる島はいくつありますか、數へされ

ないほどあります、實に送り迎ふる暇がないの
です、島の形は種々面白いのがありまして、皆名

の如く松が生ひ茂りて居りますが、只一つ裸島と
いふ島ばかりは、一本の松もありませぬ島には種々

の名があります、即 昆沙門島、惠比壽島、筈島
布袋島、牡丹餅島、屏風島、龜子島、宰相島 五

大堂、蛇島、帝島、天女島、雄島、などであつて、

其ほかにも澤山の島があります、かく青々と松の
茂りた島の間を廻るは誠に愉快です、船と申して
も屋形船は少く、大抵屋根なき船で、一艘に七八
人位乗れるのです、若し釣の出来る人ならば釣針
を用意して參りますのも亦一しほの樂みでござい
ます。

鹽釜の浦續きに扇溪と申す處があります、大
層景色のよろしい處です、此所は山が左右に分れ
て、其間に一の鷗沙灣を抱いて居ります、それが恰
度扇をひらいた様ですから、所の名となつたそう
です。其山の上には海無量寺といふ寺院がありま
したが、五六年前に焼けまして、今は少なき庵を
残すのみでございしますが、此所より松島灣を見下
すときは實に繪にかいた様です。

再船に乗りますと僅かにして、松島の波止場

につきます、灣内は波穩に目にうつる所の景色は千態萬狀自ら畫中の人となるのでございませうから、實にたのしい面白いわけて日本三景のひと稱するももつともでございませう。

此地に主なる旅館は觀月樓、松島館、加賀三、鈴木屋等ですが、觀月樓は中央の最よき位置を占め、客室も多く、眺望も亦宜し、觀月樓より半丁許参りますと、瑞嚴寺とて、有名なるお寺がありませす昔は松島寺といひし者のよし、慶長五年伊達政宗公紀伊の熊野より材をとり建立せしめられしものと傳へて居ります、寺内には政宗公環甲の像、及澤山の重寶珍器を陳列し誰人でも縦覧が出來ませす、瑞嚴寺の南一丁許觀月崎といふ所に觀瀾亭がありませす、これは昔仙臺藩主伊達家の別邸にて月見の御殿といつたさうです、もと政宗公が

伏見桃山の亭を賜はりたるものを江戸に移し、後再此地に移されしものと申しますが柱は柂をもつてつくり、觀月に最もよき所でございませう。此所より數丁隔りて雄島といふ島がありまして、渡月橋といふ橋がありませす、島の周圍には多くの岩洞がありませすが、昔僧侶の座禪した所だといふて居ります、島上にも座禪堂がありませす。

再もとまひりました道に戻り觀月樓の前を通り少し参りますと、五大堂と申す島がわりませす、二の橋が架けてありませすが、其橋は梯の様になりて居りますから、透橋と申します。

此地より松島停車場までは三十町ありませす、其途中より富山といふ所に立ち寄るときは、松島の大景を一目に見ることが出來ませす、富山は松島の東北一里半の處にありまして山上には大仰寺がわ

ります、ここより八百八島あるといふ松島の全景を眼下に見おろし遠きは靈山金華山等を眺め白帆を張りたる漁船は其間に見え隠して實に絶景といふの外はありませぬ。

此所を見終りて松島の停車場より汽車に乗りて歸るのです仙臺には僅に四十分にて着きます若し直ちに東京にかへらんと思はゞ青森上野直行の瀧車に乗れば僅に十四時間許にて歸られます、まだごらんにならない御方も御ありになりますならば避暑かたゞ此絶景を御覧になることをおすゝめ致します。

俚俗總領のじんろくと云

ふことに付きての所感

秋山七朗

世俗に總領の甚六と申す俚諺あり。抑々此總領の甚六と申す語は、何れの時代、如何なる原因に由來せしかを知らず、然れども古來我國に行はれたる俚諺にして、其意味は此處に明言する能はずといへども、一般には總領は劣等なる者との意に外ならざるべし。即總領の子は他の兄弟姉妹中最劣等なることを表出せるものなるべし。果して此の如きや否やは明ならずといへども、然し全然無根のことを顯せるにてもあらざるべく若し不幸にして全く事實なりとせば、國家の爲實に容易ならざることにして深く吾人の研究すべき

所のものたるべし。

蓋し所謂總領なるものは、即一家の長子にして

即一家の後繼者なり 國家の盛衰消長は即

又一家私人の盛衰消長に關係すとすれば、若し

一家の後繼者即總領にして 悉く甚六なりんに

は、其影響する所まことに多大なりといはざるべ

からず。余は或は世の識者諸君より敢て好奇皮想

の譏を免るゝ能はざるを怖るといへども、聊か隣

學上教育上より、此ことに付きて考究し、以て

識者諸君の教を乞はんと欲す。

總領が敢て甚六と稱せらるゝに至るに付ては、

余は、次に三要項を擧げて其原因となさんと欲す、

一、早婚の弊、其第一の原因としては、余は我

國目下の弊風たる早婚の弊に歸せんとす。之を統

計に見るに、世界文明國中、我國は最早婚の惡

弊あり、今次に各國男女の結婚年齢の平均を見

蓋し思半に過ぎん。

瑞西 男、三十一年一ヶ月
女、二十八年三ヶ月

米國 男、三十年九ヶ月
女、二十八年

英國 男、二十八年七ヶ月
女、二十五年五ヶ月

露國 男、二十五年二ヶ月
女、二十一年五ヶ月

日本 男、二十二年一ヶ月
女、十九年四ヶ月

即瑞西は、結婚の年齢最後くして、我國は最も

早婚の國なり。早婚が其父母及子供に及ぼす生理

上精神上の禍害の實に恐るべきものたるとは、

今日之を贅言するの要なし。

二二。第二の原因は母たるものが育兒教育上十分の觀念經驗なくして母となり子を育すること之なり。

蓋し今日の婦人たる者、學校に於て諸種の學問は授けらるゝなるべし、然れ共將來母となるに必要缺くべからざる兒童其もの、智識を有せず、育兒に付きての十分なる經驗を有せず、家庭教育の要を知悉せず而して互に相婚して、其子を育す。是を以て、其間に生れたる子供は、此年著き經驗不十分なる、育兒教育の不完全なる母に由りて育せらる。甚六たらざらんと欲すといへども得べけんや、即母たる人は其前に當りて遂に育兒に關する觀念を有せず、かくて出て、人に嫁し、やがて實地の取扱をなす、子供の取扱に付きて粗漏

不完全なる間違の生ずるは、毫も疑なき事なり。此の如くにして、長男は不幸にも母の犠牲に供せられ遂に精神上、若くは肉體上に、不幸なる一生不可療の缺陷を生ずるに至るなり。

三、愛情の過ぐるること。始めて生れたる子供の如何に可愛きは、經驗せる人の熟知せる所なり、長男はかくて、掌中の珠とも愛でられ、はやされて父母の熱愛するとも一方ならず、子を育することの面倒なるとも此愛情の爲めに打ち消されて、少しの苦勞をも覺えずして保育す。かくて此愛情の過ぐる結果は、即醫學上教育、上守らざるべからざる法則を破りて、顧みざるに至る。醫より注文すること、之が爲めに等閑に附せられ、學校より注文すること、之が爲めに家庭には守られず、此の如くにして長男は遂に其父母より真正の

教育を誤せらるゝに至るものなり。

以上の三原因よりして、通常長男は其心身の發達上必ず、他の弟妹等に劣るに至るなるべし。故に學校幼稚園等に於て、兄弟併び來る様なる場合に於て其二者の發達を注意觀察する時は、其發達の度に於て必ず、多少の差異を發見するに至らん。

要するに、家庭の教育は實に教育の基礎根本にして、家庭教育の完全なるものは、既に幼稚園或は學校に入學せる時に當りて其發達の異なるを見るべし。從來本邦婦人の多くは、此大切なる務を覺らず、從つて兒童に付きて研究することを知らず又、其機會をも得ざりしは、是非なき事なりといへども今日に於ては多少其機會をも得るに至り、現に余は過日來主唱して母の會なるものをも組織

せり。

前述の如き俚諺が、尙後來とても、行はるゝ様にては、我國の將來甚歎息すべき事なるべければ願くは、之を防がんが爲め、婦人諸君に於ては、女學校等に於て十分育兒の方法を研究せられ、育兒の智識なくば嫁すると能はざるは尙今日嫁入の衣類なくして嫁すること能はざるが如くに至らんことを切望に堪えず。

此一篇過般常會の席上秋山國手の演說せられたる大要を筆記せるもの、文字の誤りは筆者の責なり。

時論抄錄

抄錄子

●女子に運動を奨勵すべし

我國民は體軀の短

少と身體の虛弱を以て世界に有名なり、其原因は

衣食住の不完全なるにあれども、また大に運動の

不足にもよる、就中女子には其弊最多し、英國

にては、女子に體操を強制せしより數十年身長を

加へたる事少からずといふ、又以て我等も失望す

る事なく勉むべきなり、遊戯と體操は女子の優美

の天性を傷ふといふ者あれど決して然らず、スベ

ンサー氏曰活潑なる遊戯は、成長後男子をして紳

士たるを妨げずとせば、女子をして貴婦人たるに

妨げありとはいかなる理由ありて云ふか……

(女子の友九十四號 勝又鄭二郎)

●女子の體育に就きて 當今女子の體育は、も

はや懸念するに及ぶまじき程進歩せり。寧風潮に

乗じて却りて中道を逸するなきやの恐あり。學校

時代に於て女子の體育進歩の度高き程、少婦時代

となりての苦痛の度高し、昔氣質の舅姑の傍にて

俄かに封建時代の行儀作法を課せらるゝは如何に

苦しからん、完全の良法にはあらねど、已む無く

んば左の法によるべきか。

(一) 學校體育の勵獎は家庭の狀態を考究して、其

間の餘り隔らぬ様徐にすゝむべきこと。

(二) 父兄をして學校の方針と家庭と密接の關係を

有する様注意せしめ運動外出等を適宜にし、夕

食後は家族團樂して體育に裨益ある遊戯をなさし

むること。(日本婦人第二十號)

●女教師優待論 女子は柔順、慎密、親切、愛

嬌、等先天的教師に適當なる性質を備へ居れば、

幼年の學校には是非必要なり、然るを悲しき事に

は世人の女教師を歡迎する理由此處にあらざ、其

俸給の低きによる、當世の紳士醜業婦を落籍する

ために莫大の金を投ずるものあれど、子を教育す
 る事を知りて比較的完全なる女子となり得し女教
 師を妻に迎へんとする者なし、賤しむべき醜業婦
 は氏なくて玉の輿にのり、尊ぶべき女教師は身分
 ある紳士の所に行かれず、さりとして車夫馬丁の許
 にも嫁かれず、あたら盛の花も見る人なしに春を
 過すもの多し余は世の紳士に女教師を妻とせられ
 ん事を希望す。(姫百合 第三第六號 澁谷馬頭)

●女子の職業に就いて 凡女子の働くべき場所
 は、家内に在つて、戸外にあらざ、消費に在つて
 生産にあらざ。現時各國の工場に女子の労働者多
 く、將來益々多きを加へんとす、多數の女子を家
 庭以外の業務に使用するは利ありて害なきか、女
 子と男子とは天性同じからず、身體の組織及び知
 力に大差異あり、また女子は感情に富み事物に感

動せらるゝ事男子より多し、例へば猛烈なる器械
 の音も、男子には左程感動を予へねど、女子には
 激しき感動を予ふ、其他大きな差異は分婉の一
 大任務なり、斯くの如く差異ある男子と男子とを
 同じ職業に使用するは如何なる結果を生ずるか憂
 ふべきことなり。(おんな 第六號 添田壽一)



●華族女學校卒業式 同校は先月十日を以て終
 業式舉行、同十三日卒業式を舉行せられたり。同
 日 皇后陛下には、高倉典侍の御倍乗、香川大夫、
 山内亮、田中式部官の供奉にて臨御あらせらる。

生從一同金剛石、水は器の唱歌を奉唱の後、細川校長は證書を授與して式辭を述べられ、卒業生總代大隈こう女、答辭を述べ、後江口やへ、秋山さく、石田みよ三女の箏（姫小松）千住千賀、松平經子兩女のピアノありて、全員更に秋の宮居の唱歌を奏して、式を卒へ、陛下には御機嫌いと麗しくして還御あらせられしが、當日生徒一同へは懷中三徳一個づゝ、校長職員一同へは魚子一匹づゝを御下賜あらせられたり、いつもながら陛下の教育事業に御心懸の深きただく恐れ入り奉つる外なきことにこそ。因に云ふ、同校今回の卒業生は全科卒業二十名、別科卒業二名なり。

●東京音樂學校卒業式 先月六日上野同校講堂に於て舉行せられたり。先づ校長の報告あり次に卒業生合唱次に證書授與あり。専修科卒業生

唱歌校長告辭、菊地文部大臣演說生徒合唱等あり少時休憩の後卒業生の演奏に移りて式を卒へたり卒業生は専修部に四人、師範部七人、選科に八人乙種師範科に十人、豫科に十四人なりといふ

●前女子高等師範學校舍監安達やす子先生 同舍監はさる三月願に依り職を免ぜられしが、明治十四年本校舍監として奉職せし以來、實に二十年の久しきに亘り終始一日の如く生徒の教導に従事せられたるもの、されば同舍監の薰陶を受けて卒業せられたる、人々實に何百人なるやを知らず、今回卒業生の人々大に同志を募集して金員を徴し以て謝恩の意を表せんが爲め物品を贈呈することなれりといふ。師弟の情まことかくありたきものなり。

●保姆傳習所

東京府教育會の附屬なる同傳習

所は、幼稚園保姆並に現に兒童の母たる人、又は

將來母たるべき人、もしくはは家庭に於ける保姆（華

族又は大家）たらんとするものため、嶄新なる

保育法を傳習し、以て幼稚園に於ける保育法を改

良し、かねて一般家庭における幼児保育法を發達

せしめんとする目的を以て、本年二月まづ五十名

を限り入學を許し神田橋外第一高等女學校に於て

開始せしが、其後入學志望者は陸續絶へざるも、

既に人員に限りあるを以て悉く入學を謝絶し來

りしが、右傳習も先月下旬を以て愈終了せし

につき、更に本年九月より引き續き新學期の授業

を開始する由入學申し込期限は本月三十日まで

にして、傳習期限は六ヶ月、授業料は五十錢なりと

いふ。尙第一回卒業式は先月廿八日を以て舉行せ

られしが、卒業生徒數は四十名なりとのことな

り。

●東京音楽學校生徒募集

豫科に三十人師範科

に五十名入學を許す由にて、志願者は本月卅一日

までに申し出づべしとのことなり。

●東京府高等女學校の新築

第一高等女學校は

目下神田橋外に在りて、非常に狹隘なるを以て、

愈々淺草七軒町に新築することゝなれるが、建築

費用は凡十八萬六千四百圓にして、本年及來年の

繼續事業として着手することに決せし由、尙麻布

區に新設すべき第三高等女學校建築の件は、過日

の府會にて委員附託となれりと。

●日本赤十字社第十回總會

同會は先月九日上

野公園博物館構内に於て開會せられたり、來會者

六萬人を越えたるさへあるに、生憎の雨天にて殊

の外雑沓を極めしが、

皇后陛下には降雨をも

厭はせ給はず行啓あらせられ。左の令旨を賜はりたり。

日本赤十字社第十回の總會に臨み茲に各員を見るを喜ぶ殊に客歳の北清事件に際し能く救護の效を奏し爾來益々社業の盛大に赴くは満足に至なり。

次に小松宮總裁殿下には恭しく奉答の御詞を申し上げられたりといふ。

●四恩瓜生會の新事業 從來同會にては、養

育院に於ける外、本郷某寺院を藉りて、商家の子弟を集め毎夜々學を授くる夜學舎を設け教師三名にて熱心に従事し居れるが、今回更に淺草方面に於て無告の貧民の子弟を集めて、貧民幼稚園を設立せんとの計劃あり、故君子刀自の令孫瓜生鉞太郎君主として奔走盡力せられ居る由。吾人は一日

もはやく設立の舉を見んことを祈る。

●パウエル博士講談會 帝國教育會に於ては、

先般來遊せられたる米國ワシントン府教育總監パウエル博士を聘し、先月十三日講談會を開きしが博士は實業教育に關する經驗談として、兒童に數學上の智識を會得せしむること、及び五官の機能を活活ならしむる等に付き、種々實例を舉げて頗る詳密に説明せられたりといふ。

●紀伊家の衛生談話會 麻布飯倉徳川家(紀伊家)にては同息頼倫公の發起にて先般同邸に各親

族、近隣居住者、并に長家居住者を招き、衛生談話會を催し柳澤某幻燈に依りて説明し、山根警察醫長も同會に聘せられ一場の演説を爲し午後十一時半散會せし由なるが、我國に於て一個人の衛生談話會は之れが嚆矢なりといふ。他の大家にても

續々斯る美舉ありたきとなり。

編輯の都合により新刊紹介は次號に譲るを諒せよ

會報

入會

東京の部

東京府第一高等女學校

神田錦町三ノ一七、三輪田方

麴町區永田町二ノ三〇寺戸彦次郎方

下谷區林泉寺町三十七九

日本橋區元大工町八、加藤幸太郎方

麻布區富士見町二六

日本橋區濱町一ノ二七大澤南谷方

日本橋區濱町一ノ二相賀よし方

番町小學校

下谷區谷中初音町四ノ一三三横山大觀方

地方の部

相州横須賀町横須賀小學校

- | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東 | 德 | 矢 | 勝 | 永 | 加 | 野 | 實 | 小 | 藤 | 酒 | 藤 |
| く | 永 | 澤 | 田 | 田 | 藤 | 澤 | し | 杉 | 井 | 井 | 宗 |
| め | ふ | わ | す | よ | た | あ | い | 郷 | 秀 | 冬 | き |
| | く | さ | み | し | け | い | げ | | 子 | | く |

會告

多年本會幹事として會務に盡力せられたりし神門とも子女史には先月十九日、上海領事瀨川淺之進氏と合衆の式を舉げられたり、茲に謹んで祝意を表す、尙同女史には、今回良人の元山津に轉任せらるゝに付き、本月中旬同地に渡航せらるべしといふ



- | | | | |
|--------------------|---|---|----|
| 尾張國熱田玉ノ井百五番戶 | 桑 | 邱 | ます |
| 埼玉縣川越町松江町三百六番地 | 宮 | 川 | とら |
| 筑前國若松町水町一 | 望 | 月 | くに |
| 東京府北豐島郡南千住町大字南廿六番地 | 蘭 | 田 | うめ |

會費領收

一金六拾錢	自三十四年九月 至全
一金壹圓貳拾五錢	自三十四年四月 至全 三十三年度分 十二月
一金九拾五錢	自三十四年四月 至全 三十三年度分 九月
一金壹圓貳拾錢	自三十四年六月 至三十五年七月
一金壹圓	自三十四年十月 至全
一金貳拾錢	自三十四年五月 至全 六月
一金五拾錢	三十三年度分 三十四年四月分 外二五錢
一金壹圓	自三十四年四月 至三十五年一月
一金九拾五錢	自三十四年四月 至全 三十三年度分 九月
一金六拾錢	自三十四年十月 至三十五年三月
一金六拾錢	自三十四年七月 至全 三十四年十二月
一金七拾錢	自三十四年七月 至三十五年一月
一金壹圓貳拾五錢	自三十四年四月 至全 三十三年度分 九月

波多野とく
後 閑きくの
谷田部 じゅん
松村 さだ
高橋 忠次郎
林 ふみ
町田 則文
建部 よれ
佐方 しづ
岩崎 かの
松岡 みち
桑岡 ます
小出 雷吉

一金貳拾錢	自三十四年七月 至全
一金貳拾錢	自三十四年七月 至全 八月
一金參拾錢	自三十四年七月 至全 九月
一金參拾錢	自三十四年七月 至全 九月
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金五拾錢	自三十四年八月 至全
一金參拾錢	自三十四年七月 至全

野村 きん
矢野 ふさよ
宮川 とら
田邊 はか
岩本 ふく
丸山 とめ
高木 みつ
小寺 あや
岡田 ふみ
今井 つな
野崎 ひで
春田 たか
伊藤 貞勝
内藤 この
岡田 みつ
森田 きく
園田 うめ

高等師範
 學校教授
 東京府師範
 學校教諭

黑田定治君閱及序
 立柄教俊君校閱

國民教育學會編

新國民心理學

近來心理學の著作の梓に上る者甚多しと雖、未だ國家教育の依りて以て立つところの國民の心性を講究し、その心理を説明したる著作を見ざるは、識者の常に遺憾とするところなりき。本會此に見るあり、近代大家の著作に藉りて以て國民心理學の大要を叙述し、此に本書を編纂せり。蓋し本邦に在りて始めて見るところの良書なり。

女子高等師範學校講師岡田起作先生編并書

女子書翰文

文部省檢定濟
 上卷正價金貳拾五錢 下卷正價金貳拾八錢 郵稅各金四錢宛

女子習字帖

一卷金拾錢 二卷金拾壹錢
 三卷金拾貳錢 四卷金拾五錢 郵稅各金貳錢宛

全四册

發兌元

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金昌堂

明治三十四年二月六日內務省許可
 明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

烏丸帖

上卷金拾八錢 下卷金貳拾錢 郵稅各金四錢宛

全二册

古今和歌集序

定價金貳拾五錢 郵稅金貳錢

新刊